

42591

教科書文庫

4
810
51-1926
20003 02258

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

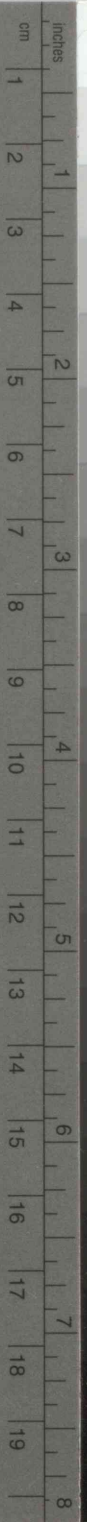


© Kodak, 2007 TM: Kodak

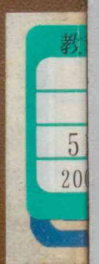
Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



編平彌田吉
文國範師
 用部一第
 八卷



資

教科書文庫
4
810
51-1926
2000302258

375.9
Y019



師範國文第一部用卷八

目次

一	秋の力	網島梁川	一
二	落柿舎の記	向井去來	四
三	嵯峨日記	松尾芭蕉	六
四	藤原道長	(大鏡)	二
五	法成寺の造營	(榮華物語)	六
六	飛鳥川の淵瀨	兼好法師	三
七	ミケランジエロ	柳澤健	三
八	狩野芳崖	岡倉覺三	三

目次

九 菅原大臣……………〔大鏡〕 元

一〇 人はいさ……………〔古今和歌集〕 望

一一 業平朝臣の東下り……………〔伊勢物語〕 吾

一二 落花の雪……………〔太平記〕 吾

一三 一夜の神興……………八波則吉 禿

一四 五重塔……………幸田露伴 空

一五 謠曲……………芳賀矢一 吉

一六 鉢の木……………〔謠曲〕 全

一七 法の夕……………上田敏 老

一八 歌人西行……………藤岡作太郎 一〇〇

一九 月の前……………上田秋成 二〇〇

二〇 小品三章……………

八月十五日芳宜園にて曇る夜の月を見る……………村田春海 一七

砧を聞く……………清水濱臣 一九

夕……………中島廣足 二〇

二一 出家とその弟子……………倉田百三 二二

二二 世界の四聖……………高山樗牛 二四

一 出雲の秋

二 世界の四季

三 秋の力

四 秋の力

五 秋の力

六 秋の力

七 秋の力

八 秋の力



明治初年、自然主義が流行した時、人々個性を主張する者が出た。これに對して、吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに生り出でたる赤き柿の實の累累たる

綱島梁川 名は榮一郎 倫理學者 明治四十年歿 年三十五 あれこれを あれこれを集めて春の臚かな (芭蕉)

師範國文第一部用卷八

一 秋の力

綱島梁川

あれこれを集めて春の臚かな (芭蕉) 出雲の秋 吾嘗て終日秋を郊外に探りて秋に會はず、歸路會、夕空鮮かに生り出でたる赤き柿の實の累累たる

簡潔清新
滑稽脫俗

大空量ヲ傳キト
此上時間並チ智
ヲ入レルコト

代リカワリ

其代リニシテ
其代リニシテ
其代リニシテ

徹味の二層開
ケリ脱俗

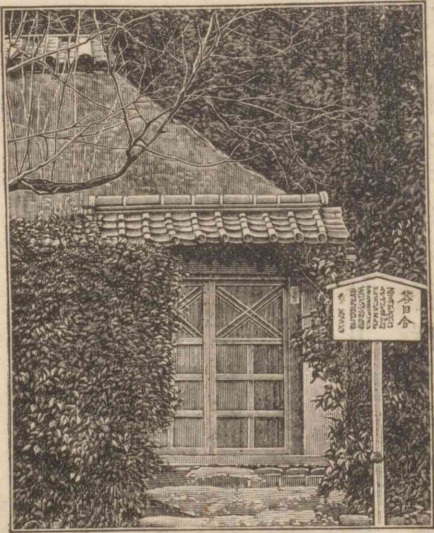
前巻時代

ずして、赤裸々の事實にあり、思想にあり。(病間録)

二 落柿舎の記 俳文 向井去來

嵯峨に一つの古家侍る。そのほとりに柿の木四十本あり。五
年六年経ぬれど、このみも持來らず、代がふるわざも聞かねば、も
し雨風に落されなば、王祥が志にも慚ぢよ、若し鳶鳥にとられな
ば天の帝の恵にも漏れなんと、屋敷もる人を常はいどみのし
りけり。今年八月の末、彼處に到りぬ。折節都より、商人の來り、
立木に買求めんと、一貫文差出し悦びかへりぬ。予は猶そこに
留りけるに、ころ／＼と屋根はしる音ひし／＼と庭につぶるゝ
聲よすがら落ちもやまず。明くれば商人の見舞ひ來り、梢つく

落柿舎
京都の西郊上嵯
峨小倉山の麓
去來の隠栖
向井去來
俳人
蕉門十哲の一人
肥前國生
京都に住む
寶永元年(二三
六四)歿
年五十四
王祥が志
有_二拜_一李_{結實}、
母命守_レ之。每_二
風雨_一、祥輒抱_レ樹
而泣(晉書王祥
傳)



落 柿 舎

づく_レと打詠め、我むかふ髪_レの頃より、白髪生ふるまで此の事を業
とし侍れど、かくばかり落
ちぬる柿を見ず。きのふ
の價返しくれたびてんや。
と侘ぶ。いと便なければ
許しやりぬ。此の者の歸
りに、友どちの許へ消息送
るとて、みづから落柿舎の
去來と書きはじめけり。
柿_王の住居、即ち落柿舎は、柿の枝は嵐山の近き嵐山。
柿ぬしや、こずゑは近き嵐山。(風俗文選)

芭蕉の俳文 奥の細道
嵯峨日記

師範國文第一局部用卷八

松尾芭蕉
江戸時代の俳聖
伊賀上野生
元祿七年(二二
五四)歿
年五十一
元祿四年
芭蕉四十八歳こ
の年京大津名古
屋に遊んで江戸
に歸る

凡兆
春花園凡兆
芭蕉の門人
臨川寺
大堰川の北岸
天龍寺の東隣
松の尾
渡月橋の畔大堰
川を南に渡つた
處
松尾神社虚空藏
などがある
虚空藏
法輪寺
小督屋敷
高倉天皇の寵姫
小督局の隠栖し
た處といふ

三 嵯峨日記

松尾芭蕉

元祿四辛未卯月十八日、嵯峨に遊びて去來が落柿舎に至る。
凡兆共に來りて、暮に及びて京に歸る。予はなほ暫く留むべき
由にて、障子つゞくり、葎引きかなぐり、舎中の片隅一間なる處を
臥處と定む。机一つ、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首世繼物語、源
氏物語、土佐日記、松葉集を置き、唐の蒔繪かきたる五重の器に様
様の菓子を盛り、名酒一壺、盃添へたり。夜の衾、調菜の物ども、京
より持來りて貧しからず。予貧賤を忘れて清閑を楽しむ。
十九日。午半、臨川寺に詣づ。大堰川前に流れて嵐山右に高く、
松の尾の里に續けり。虚空藏に詣づる人往きかひ多し。松の
尾の林の中に小督屋敷といふあり。すべて上下の嵯峨に三處
あり。何れか確かならん。かの仲國が駒とめたる處とて駒留
言をなするの使

柳花はたの如くちんか

柳眉りまたん

花頼りまたん

巫女廟をまて、巫山の
美人をあげた。
而してハカライ寄れた。
夏まき節。

昭君村

漢の元帝の妃王
昭君の生れた村
杜市に在り、
萬竈赴二荆門、
生二長明妃一尙
有レ村。
巫女廟
巫女は楚の懷王
が高唐に遊んで
夢に見た巫山の
女神

北嵯峨の祭

四月中亥日今は
五月二十三日に
行はれる愛宕神
社の祭
神輿の渡御があ
る
羽紅
凡兆の妻とめ
昔の主
富家三井家の一
門で三井秋風と
いつた人

の橋といふがこのあたりに侍れば、暫くこれによるべきにや。

墓は三軒屋の隣、藪の中にあり。標に櫻を植ゑたり。畏くも錦
繡綾羅の中に起き臥して、終に藪中の塵芥となれり。昭君村の
柳、巫女廟の花の昔思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果。
嵐山やぶのしげりや風の筋。

斜日に及んで落柿舎に歸る。凡兆京より來る。去來京に歸る。
宵より臥す。

二十日。北嵯峨の祭見んと羽紅尼來る。去來途中の吟とて語
る。

つかみあふ子供のたけや、麥畑。
落柿舎は昔の主の作れるまゝにして處々頽敗す。なかくくに

五月
六ツキまつ

花橋の香をわけば
昔の人の袖の香をよめる

嵯峨の山に竹敷をよめる

又嵯峨の山に竹敷をよめる
又嵯峨の山に竹敷をよめる

造り瑩かれたる昔の様より今のあはれなる様こそ心留れ。彫
せる梁、晝ける壁も風に破れ雨に濡れて、奇石、怪松も葎の下に隠
れたり。竹縁の前に柚の木一本、花芳しければ、
柚の花がすて居る。こが昔料理して柚を用いた當草を世話か思ひしき

二十一日。大竹敷をもつて来る月夜の晩に相いふか、一重高倉をまかり通つた。——雄大の乳分
子規、大竹敷をもつる月夜。
又来年も嵯峨の山をよめる。いづれか又来年も嵯峨の山をよめる。食ひたいものだ。

またや見ん、いちごあからめ、嵯峨の山。
料理の材料 尼羽紅

去來兄の方より菓子、調菜の物など贈りて、今宵は羽紅夫婦を留
めて蚊屋一張に五人舉りて臥したれば、夜も寐ね難くて、夜半過
ぎより各起出でて晝の菓子盆など取出でて曉近きまで話し明
す。

去年の夏、凡兆が宅に臥したるに、二疊の蚊屋に四箇國の人臥し
たり。「思ふこと四つにして夢もまた四くさ」と書捨てたること

どもなど言出して笑ひぬ。明くれば羽紅、凡兆京に歸る。去來
猶留る。

二十一日。昨日寐ねざりければ、心むつかしく、空のけしきも昨
日に似ず朝より打曇り、雨折々音づれて終日眠り臥したり。暮
に及んで去來京に歸る。今宵は人もなく、晝臥したれば、夜も寐
ねられぬまゝに、幻住庵にて書捨てたる反古を尋ね出して、慰み
に清書す。

二十二日。朝の間、雨降る。今日は人もなく寂しきまゝに、むだ
書きして遊ぶ。その詞、
おとこはて味も、徹底ス

喪に居る者は哀みがあるじとし、
酒を飲む者は樂みがあるじとし、
愁に住する者は愁をあるじとし、

幻住庵

近江國滋賀郡石
山村の奥國分山
にある草庵
前年芭蕉こゝに
留ること半年

境邊に居るに、
たのしみあり。

嵯峨の徹底に、
行くことと傳ふ

徒然に住する者は徒然をあるじとす。
寂しさをなくば
訪ふ人も思ひ絶
えたる山中に寂
しさをなくばなほ
うからまし(西
行)

長嘯 木下若狭守勝俊
素堂 山口官兵衛
芭蕉の俳友

乙州 芭蕉の門人

「寂しさをなくばうからまし」と西上人の詠み侍るは寂しさをある
じなるべし。又詠める、
山里にこはまた誰を呼子鳥ひとり住まんと思ひしものを。
獨り住むほど面白きはなし。長嘯隱士の曰く「客は半日の閑を
得れば、主は半日の閑を失ふ」と。素堂常にこの語を憐む。予も
亦
とほ或寺にて獨り居ていひし句なり。
暮方、去來より消息す。乙州が武江より歸り侍るとして朋友門人
の消息どもあまた届く。その中曲水が狀に、予が住みすてし芭
蕉の舊跡を訪ねて宗波に逢ふ由。

小鍋り淋しい
若楓の葉の
此れも時が
此れも時が
此れも時が

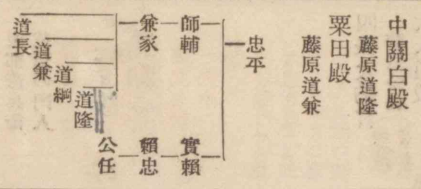
嵐雪 服部彦兵衛
芭蕉の門人

見ず」と書き、
若楓、茶色になるもひと盛り。
嵐雪が文に
せんまいの塵にえらるゝ蔵かな。
出がはりや、をさな心にもあはれ。
四條大納言のかく何事にも勝れてめでたくおはしますを、大入
道殿いかでかゝらむ。羨ましくもあるかな。我が子ども影

四 藤原道長

四條大納言 藤原公任
大入道殿 藤原兼家

大鏡
作者不明
中世の言葉で現代語に直訳し



なめり
なめり
あそびり音樂をする所か

だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ。と申させ給ひければ中
 關白殿、栗田殿などはげにさもや思すらむと恥かしげなる御氣
 色にて物ものたまはぬに、この入道殿はいと若うおはします身
 にて影をば踏まで、面をば踏まぬ。とこそ仰せられけれ。誠に
 こそさおはしますめれ。内大臣殿をだに、近く見奉り給はぬよ。
 さるべき人はとうより御心だましひの猛く、御まもりもこはき
 なめりとおぼえ侍るは、華山院の御時に五月しもつやみに、五
 月雨も過ぎて、いとおどろしくかきみだれ雨のふる夜、帝さ
 うざうしくや思召しけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びお
 はしましてけるに、人々御物語申しなどし給ひて、昔恐しかりける
 事どもなどに申し給へるに、今宵こそいとむつかしげなる
 夜なめれ。かく人がちなるだにけしきおぼゆ。まして物離れ

入道
藤原道長

豊樂院
大内裏の朝堂院
の西にある
仁壽殿
内裏の清涼殿の
東にある
塗籠
周囲を壁で塗つ
た納戸の類
大極殿
朝堂院の正殿で
大禮を行ふ處



(實故賢前) 長 道 原 藤

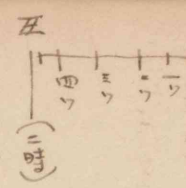
時なめりいかにあらう
 たる處などいかならむ。さあらむ處に一人いなむや。と仰せら
 れけるに、えまからじ。とのみ申し給ひけるを、入道殿はいづくな
 りともまかりなむ。と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、
 「いと興ある事なり。さ
 らばいけ、道隆は豊樂院、
 道兼は仁壽殿の塗籠、道
 長は大極殿へいけ。」と仰
 せられければ、よその君
 たちは便なき事をも奏
 してけるかなとおもふ。
 又承らせ給へる殿ばらは、御けしきかはりて、やくなしとおぼし
 たるに、入道殿はつゆさる御氣色もなく、私の從者をば具しさ

四 藤原道長

右の陣ならんか
ト使の陣

中関白 伊周

子(12) 由(1)フ



奏する一御太極へ
ト使の陣

吉上吉上軍軍の陣陣ならんか
衛府の下役衛府の下役常
詰詰のもの
瀧口瀧口
禁中の警衛など
に任ずる武士
昭慶門昭慶門
大内裏の八省院
の北の外門
子四つ子四つ
午前二時に近い
ころ
奏して
内暨が時を奏し
て
丑
午前二時ころ
右衛門の陣
大内裏の外郭西
面の宜秋門の内
承明門
内裏の紫宸殿の
南の正門
宴の松原
宜秋門の外で豊
樂院の後に當る
所

ワテ行ク程工事を在陣下程 漸漸の陣陣ならんか
ぶらはじ。この陣の吉上吉上まれ瀧口瀧口まれ一人昭慶門まで送れと
おほせごとたべ。それより内には一人入り侍らむと申し給へ
ば「證なき事」とおほせらるゝに、げにとて御手箱におかせ給へる
小刀拜儀申して立ち給ひぬ。いま二所もにがむく各おはさふじ
ぬ。「子四つ」と奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりに
けむ。「道隆は右衛門の陣より出でよ、道長は承明門より出でよ。」
と、それをさへ分たせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿
陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどに、その物ともなき
聲どもの聞ゆるに、ずちなくてかへりたまふ。栗田殿は露臺の屋中程程
外までわなゝくわなゝくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌の程
に、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、物もおぼえて
身のさぶらはゞこそ、おほせ言も承らめとて、各立歸りまゐり給

高御座
大極殿の正面の
玉座

こは花万り(花)
こは花待り(花)
こは花は候(花)
こは花は候(花)
こは花は候(花)
こは花は候(花)

へれば、御扇をたゝきて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見え
させ給はぬを、いかゞと思召すほどにぞいとさりげなく、ことに
もあらずげにて、まるらせ給へる。「いかに」と問はせ給へば、
いとどかに御刀にけづられたるものをとりぐして奉らせ給
ふに、「こは何ぞ」とおほせらるれば、たゞにてかへりまゐりて侍ら
んは證さぶらふまじきによりて、高御座の南面の柱のもとを削
りてさぶらふなり。とつれなく申し給ふに、いとあさましうおぼ
しめさる。こと殿たちの御氣色は、いかにもなほなほらでこの
殿のかくて参り給へるを、帝より始め、感じの、しられ給へど、羨
ましきにや、又いかなるにか、物も言はでぞ侍ひ給ひける。なほ
疑はしく思召されければ、早朝藏人して削り屑をつがはして見
よと仰言ありければ、もていきておしつけて見給ひけるに、つゆ

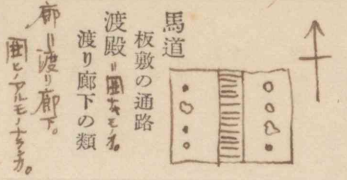
(三) 學期

藤原道長の傳説ヲ指クニ目的アリ
 法成寺
 御堂
 法成寺
 後一條天皇寛仁三年(六七)道長創建
 址は鴨河の右岸今之京都御所の東隣
 攝政殿
 藤原頼通
 道長の子
 殿
 藤原道長

違はざりけり。その削りあとはいとけざやかに侍るめり。
 末の世にも見る人はなほあさましき事にぞ申し、かし。(大鏡)

五 法成寺の造營

道長は御心地例さまになりはてさせ給ひぬれば、御堂の事おぼし急がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、まづこの御堂のことを先につかうまつるべき仰言のたまふ。
 殿の御前もこの度生きたるは別事ならず、我が願のかなふべきなめり。と宣はせて他事なくたゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして瓦葺きたり。さまざまに思しおきて急がせ給へば、夜の明るるも心もとなく、日の暮るゝも口惜しうおぼさ



(畫光弘譯中) 營造の寺成法

れて、夜もすがらは、山をたゝむべきやう、池を掘るべきさま、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々さまざま作りつけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。
 丈六の金色の佛を、數も知らず作りなめ、そなたをば、北南と馬道をあけて、道をととのへ作らせ給ひて、廊下渡殿かず多く作らせ給ふに、雞の鳴くも久しくおぼされ、宵曉の御行も怠らず、安きいも大とのごもらず、たゞこの御堂の事のみ深く御心にしませ給へり。

私有地よりなる

公田よりなる

御封 親王以下諸臣に賜ふ民戸

御莊 莊園

寺社又は權勢ある人々の私有地

地子 公田を借りて耕したものの納める租

日々に多くのの人々参りまかて立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封御莊どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきにおぼしたち、國の守ども、地子官物はおそなはれども、たゞ今はこの御堂の夫役材木、檜皮、瓦など多く参らすることを、我もくくと競ひつかうまつる。大方近きも遠きも参りこみて品々方々、あたりくにつかうまつる。

或處を見れば御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかりなみゐて仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、匠工ども二三百人のぼり居て、大きな木どもには太き綱をつけて、聲を合はせてえさまさと引上げさわぐ。御堂の中を見れば佛の御座作り輝かす。板敷を見れば木賊、椋

ツシ根リ人チラ...

大津

祇園精舎
精舎
精進の場所

大津 近江國滋賀郡大津市

琵琶湖の津

梅津 山城國葛野郡梅津村

桂川の津

須達長者 釋迦の時の富商

Sudatta

祇園精舎 印度の舍衛國の太子祇陀と須達多と力を合せて作つて釋迦に獻じた精舎

の葉などして、四五十人手ごとに並み居て磨き拭ふ。檜皮葺壁塗瓦作なども數を盡したり。又年老いたる翁などの、三尺ばかりの石を心に任せて切りと、のふるもあり。池を掘るとして四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のぼりたち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに、綱をつけて叫びの、しり引きもてのぼるあり。賀茂川の方を見れば、筏といふものに、樽材木を入れて棹さして心地よげに謠ひの、しりてのぼるめり。大津梅津の心地するも、西は東といふ事はこれなりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。すべていろく、さまざま、言盡しまねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎造りけんもかくやありけんと思ひ、かの須達長者の祇園精舎造りけんもかくやありけんと思ひ、見ゆるを冬の室、夏の風各ことく、なり。

三任以上の人が
伊弉に...

道長が曹の男

勢のある

かゝる御勢にそへて入道せさせ給ひて後はいと勝らせ給へり
 りと見えさせ給ふにも猶なべてならざりける御有様かなと近
 う見奉る人は尊み遠う見奉る人は遙かに拜み参らす。今はこ
 の御堂のあたりの木草ともならんと思へる人のみ多かり。そ
 なたざまに赴けば海の浪もやはらかにたちて、この御堂の佛を
 もて運ばせ河も水澄みて、快く浮べもて参ると見ゆ。猶なべて
 この世の事とは見えさせ給はず。まづは先年に長谷寺にある
 僧の御祈禱をいみじうして寝たりける夢に、大きにかめしき
 男の出で来て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘
 法大師の佛法興隆の爲にうまれ給へるなり。とぞ見えさせ給ひ
 ける。又天王寺の聖徳太子の御日記には、王城より東に佛法弘
 めん人を我と知れ。とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにて

長谷寺
大和國磯城郡初
瀬町長谷寺
有名な観音堂が
ある

天王寺
今の大阪市天王
寺區にある四天
王寺

もおろかならぬ御事なり。(榮華物語)

世の中は無常

六 飛鳥川の淵瀬

兼好法師

兼好法師
俗名吉田兼好
隱逸で歌人
觀應元年(1110)
寂
年六十九

飛鳥川
世の中は何か常
なる飛鳥川昨日
の淵ぞ今日は瀬
になる(古今集)

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去りたのしびか
 なしび行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、
 變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰と共にか
 昔を語らん。
 まして見ぬ古の、やんごととなかりけん跡のみぞ、いとほかなき。
 京極殿法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにけるさまはあ
 はれなれ。御堂殿のつくりみがかせ給ひて、莊園多く寄せられ、
 わが御ぞうのみみかどの御うしろみ、世のかためにて、行末まで

京極殿
京都土御門の南
京極の西にあつ
た藤原道長の邸
法成寺の西隣

金堂 七堂の内の重なる
 正和 花園天皇の御代
 (七三二—七三六)
 無量壽院 阿彌陀堂
 九體 九品佛
 行成 藤原行成
 三蹟の一人
 後一條天皇萬壽
 四年(六六七)薨す
 兼行 大和守源兼行
 一條天皇時代の
 人
 能書 能畫

とおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせはてんとは
 おぼしてんや。大門金堂など、近くまでありしかど、正和の頃南
 門は焼けぬ。金堂はその後倒れ伏したるまゝにて、
 わざもなし。無量壽院ばかりぞそのかたとして残りたる。丈六
 の佛九體、いとたふとくて列びおはします。行成大納言の額、兼
 行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法華堂なども
 いまだ侍るめり。これもまたいつまでかあらん。かばかりの
 名残だになき處々は、おのづから礎ばかり残るもあれど、さだか
 らぬに、
 知らぬ人もなし。
 さればよろづに、見ざらん世までを思ひおきてんこそはかなか
 るべけれ。(徒然草)

柳澤健

七ミケランジェロ

柳澤健

外務省翻譯官
 明治二十二年福
 島縣若松市生
 聖ペトロ ローマ法王
 に屬する中
 央會堂
 世界最大の
 會堂と云ふ
 ヴァティカン
 ローマ法王
 の宮殿
 今は博物館
 圖書館美術
 館として開
 放されてゐ
 る
 システイナ
 一四七三年
 法王シキス
 タス四世の
 建てた宮殿
 Sistine chapel

聖ペトロの寺院續きになつてゐるヴァティカンの教皇廳——
 その一部に、このシステイナの會堂といふのがあることは言ふ
 までもなからう。自分がその會堂に足を踏入れることの出來
 たのは、實に羅馬に着いて七日目に當る、ある風の強い晴れた日
 の午前のことであつた。このシステイナ會堂のミケランジェ
 ロを見るといふことは、羅馬に來る程の旅人にとつては、例外的
 く、そのプログラムのなかの最も重なるものとなつてゐるとい
 つていい。日本にある自分の親しい友の一人などは、昨夏渡歐
 の途に上らうとしてゐた自分に贈るに、システイナで、親しくミ
 ケランジェロを見得る君の幸福のみは、全く羨むに値する。とま

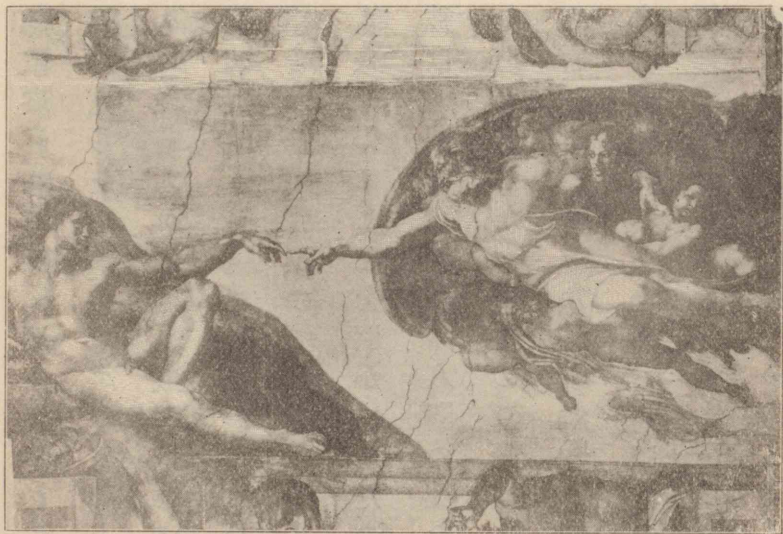
七ミケランジェロ

ミケランジェロ
Michelangelo
Buonarroti
(1475-1564)
彫刻家
畫家
建築家

での言葉をもつてした。それなのに、自分はその羅馬の土地を踏みながら、七日間といふものを、このシステイナを見ることなしに過して來たのだつた。
が、それは決して自分の怠慢でも、又特に心あつてのことでもなかつた。一週に二度程、それも時間を制限してしか、開館されな
いといふことが、その會堂を見る機会をこんなにも遅れしめた
のに他ならなかつた。それだけに自分の焦燥熱望は、日と共に
烈しかつた。さうした自分が、言はゞ念願が叶つたやうに、この
會堂の入口に立つことが出來た時には、覺えずある戰慄が、心の
底まで走るのを感じないわけには行かなかつた。――

ミケランジェロ・ブオナツロテイ。お、それは何といふ偉大な

エホバ
Jehovah
ヘブライ人
が神を指し
て云ふ語
上帝



(畫井天堂ナイテスシ馬羅) 造創作ロエジンラケミ

名^精讚むべき名であるこ
とか！「天地創造」の神
エホバをいと高き神と
してあがめるならば、自
分たちは「天地創造」の人
ミケランジェロ・ブオナ
ツロテイを、それが人た
るの故をもつて、尙更エ
ホバにもまして祝福^まま
れねばならぬ理由を見
出す。しかも彼の創造
せる世界の、力に満ち、情

調和
統一
均齊

ラッファエロ

熱に溢れ、怒に慄へ、涙に傷み、さては憫みと優しみとに惱める人間に充ちたるは、かのエホバが、土の塵を以て人を造り、生命を其の鼻に嘘入れて造り成したといふ人間の世界の無表情無精力には、比すべくもないと言つていふ。彼は、たしかに神以上の仕事をなし遂げたのではないか！ 人の力が神以上のことさへもなし得ることを明かにしたのではないか！
彼は人間を造つた。人間の魂を、その内部の聲を、肉をもつて現し造り出した。彼のこの精神は、明かに希臘精神から出てゐると言へる。併しながら、希臘精神が常に肉を求め、女性にもあらず男性にもあらざる中性の美なるものを狙つて、ひとへに優雅典麗の趣を缺かすまいと努めてゐたに反して、彼が肉に求めたものは、常に男性の力と情熱とであつた。「單純なる人間！」

ジュリアス二世

Julius II (1441-1513) ローマ法王
文藝復興期の
藝術家を
保護した英

ラッファエロ

家 伊太利の畫

Raffaello Sanzio (1483-1520)

レオナルド

家 伊太利の畫
彫刻家 建築家

Leonardo da Vinci (1459-1519)

チ、アノ

Titino (1477-1576) 伊太利の畫
家

教王ジュリアス二世がこのシステイナの壁畫を仰ぎ見て、その粗野な構圖に覺えず不平の言葉を洩した時に、ミケランジェロの口から出た言葉はこれであつた。單純なる人間！
彼はそこに優雅典麗の媚容を殊更に添へようとはしなかつた。またラッファエロやレオナルドやチ、アノやがやつたやうな、美しい空、星、花、丘を描き添へることすらもしなかつた。
彼は、たゞ力と情熱との外に何ものをも知らぬ眞裸の人間を、――單純なる男性を創り出したゞけであつた。併しながら、この單純のなかに、この力と情熱とのなかに、おのづと湧きいづる優しさと温かさとは、觀る者の心のなかに、いつ知らず沁み通らずにはゐない。この強い力と烈しい情熱との間から、自然と匂ひ出づるこの優婉温藉の感情ほど、深い美しさをもつて人の胸に

ボッティチェリ
 伊太利フ
 ロレンス
 の畫家
 Botticelli Sandro
 (1447—1515)
 コ
 フラ・アンジェリ
 Fra Angelico
 (1387—1455)
 伊太利の
 復興期の
 畫家

迫るものはない。それは、美しい空、星、花、丘、さては優しげなる圓輪や媚態やのはるかく上にあるものだ。ミケランジェロの創り成した人間こそは、まこと人間以上の人間、永遠なる人間、—エホバの造り給うた不完全なる人間を、完全なるものに改造せるものと見做すべきでなくして何であらう。希臘を母として、更にその母よりも強く深き精神と肉體とを以て生れ出た子、熾んなる神と獸との心と姿相をもつて生れ出た子、—それが實にミケランジェロであつた。希臘が第一の世紀ならば、第二の世紀は彼に始つたのだと言はなければならぬ。この會堂のなかには、ほかにボッティチェリの壁畫がある。またこれに近い部屋や廊やにラッファエロの壁畫があり、またフラ・アンジェリコの壁畫がある。これらの作家は、それ／＼に自

神理の
 象徴の
 人間

分の深い好愛のまとなつてゐることは言ふまでもなかつた。殊にこれらの作家の持つ優しく慎しみの深い心の世界はその甘美な色彩と線條の魅力と相俟つて、自分の魂をこの上なく柔かに愛撫してくれるのを感じる。併しながら、システイナのミケランジェロを見て來た眼で、これらの作品を眺め廻した時に、先づ胸に浮んで來た感じは、その弱々しさ、その脆さであつたと言つてよかつた。ミケランジェロが眩い日光の中に立つ立像であるとするれば、それらの製作家の製作は、その陰影に他ならぬものであつた。室内の立像若しくは月夜の影に他ならぬものであつた。……

自分の心身のなかで、何とも知られぬ異常なる力の眼覺め行くことを覺えながら、この大いなる世界、システイナの會堂を後に

して、南國らしく陽の燃えさかる外へ出た。(南歐遊記)

岡倉覺三

美術鑑賞家

東京美術學校長

江戸生

大正二年卒

年五十二

五欲

眼耳鼻舌身より

おこる欲

大士

観音大士

八 狩野芳崖

岡倉覺三

一幅の濃淡、人天相分る。上は則ち無量光明の淨界なり、下は則ち五欲昏迷の穢土なり。大士の容顏端嚴にして、愁に和して微笑を含み、左手に楊柳を撚し、右手に寶瓶を傾け、瀉ぎ來る無明空中一滴慈悲の水は清魂の人間に歸るを送るものなり。赤子の合掌して仰いで菩薩を見るものは、無知清淨にして餘念を懐かず。亂山突兀、暮雲暗澹、煙冷かに風荒る。憐むべし、呱呱たる阿彌何處にか墜下し去りて、憂悲煩惱の長夜に迷ひ、那邊の淨池に向つて如意心蓮を發き、再び慈悲の海に遡るを得ん。嗚呼、是芳

本丸寺に法
如母花

有
一室瓶盛



(藏校學術美京東) 筆崖芳野狩 像音觀母慈

崖狩野翁が畢生の傑作観音大士の像なり。
翁嘗て人に語つて曰く、人生の慈悲は母の子を愛するに若くは



蘇 武 (筆崖野狩)

なし。観音は理想的の母なり、萬物を發生煦育する大慈悲の精神なり、創造化育の本因なり。余此の意象を描かんと欲する、こ

落款

花月の天地
凡流人の心コソモル

たちま。

ここに年あり。未だ適當なる形相を得ず。と。
 此の圖は翁が最終の揮毫に係り、長逝に先だつこと僅かに四日、
 畫き了へて、未だ款を署するに至らざりしものなり。蓋し翁平
 生の心事此の一幅畫中に留存するものあらん。其の筆墨の沈
 著淳厚にして、其の賦色の明麗渾融なるは近世多く比類を見ず。
 特に意匠の高尙秀絶なるに至りては、技道に進むものにして、遙
 かに古人を凌駕せんとす。尋常一様の墨を玩び筆を弄し、花天月
 地に風流三昧を事とするものと時を同じうして語るべからず。
 彼のミケランジェロの畫きたる創造の圖は歐洲美術の神品と
 稱すべく、氣力豪邁にして布置雄大、唯見る雲間の上帝隻手を伸
 して大地を指し、倏忽一個の壯士を現出するを。彼は則ち上帝
 の命令念力を以て人を創造するなり。是は則ち觀音の慈悲法

淑
淑

力を以て人を發育擁護するなり。佛家發生の深理は自ら基
 造物の^{大旨}と異なる所あり、其の美術上の形相も亦隨つて同じ
 からず。人若し畫中の心情を看破し去らば、豈妙悟の天外より
 落つるなからんや。憐むべし、此の超凡の絶技を抱きたる人は、
 未だ天下に名を成す能はずして空しく黄泉の客となれり。然
 れども翁の妙想は竟にミケランジェロをして美を擅にせしめ
 ざりしなり。

翁姓は狩野、文政十一年正月十三日、長州に生る。幼名幸太郎。
 父を晴卓と曰ふ。家世萩藩の畫師たり。父、性剛毅にして俠氣
 あり。自ら信ずること頗る固く、其の子を訓ふること甚だ嚴正
 なり。翁が勇邁果敢の氣力は多く嚴君の鍛鍊による。母、溫柔
 貞淑、其の愛育慈養は翁の常に追念したる所にして、後年觀音の

木挽町

江戸木挽町

狩野四家の一

狩野

狩野古法眼元信
以來徳川幕府畫
所預となる

室町幕府以來の
繪師

周文

室町時代の畫僧
京都の相國寺に
居た

玉澗

支那南宋の畫僧
若芬の號

夏明遠

支那南宋の畫家

仇英

支那明代の畫家

畫ある所以も亦此に基づく所あるべし。翁の豪懷英氣風雲を叱咤する筆を以て、時として情致纏綿曉露の海棠に墜つるが如き一種幽婉の變體あらしめたるも亦故ありと謂ふべし。年十九にして始めて江戸に來り、木挽町狩野畫所に入る。爾來十有餘年、螢雪の功を積み、狩野門流の正格を練磨し、非凡の精妙を顯し、當時秘訣と稱したる師門の口傳の如きも、暗合默會して先輩を驚かし、巍然として畫所屈指の名手たり。安政六年江戸城本丸焼失す。再建に當り、大廣間天井の裝飾は翁選ばれて之を託せらる。然れども翁の心は未だ大いに安んぜざるものあり、一朝自ら悟る所ありて、遂に別天地を開かんとするに至れり。當時狩野の畫風漸く衰微に瀕し、粉本摸寫の弊最も盛にして、周文の遠山に玉澗の雁陣を横たへ、夏明遠の樓閣に仇英の人物を

雪舟

室町時代の畫僧

馬遠

支那南宋の畫家

夏珪

南宋の畫家

相阿彌

室町時代の畫家

雪村

室町末期の畫僧

坐せしめ、以て自家の製作となす者あり。當時の一幅の丹青を解剖し去らば、雪舟の樹木巖石、馬遠の蘆荻流水、夏珪の牧牛、相阿彌の歸帆を點々排列するに過ぎず。畫家の新案に係るものは纔かに雲烟と落款とのみ。翁の洞然大觀して自ら破格を企てたるは洵に已むを得ざりしなり。一日童子あり、戲に虎を描く。眼は是兩々の丸子、耳は是雙々の遠山、足は是四竿の老竹、斑文五六點、鬚毛兩三絲、添ふるに長大の尾を以てす。翁觀て大いに喜び、起舞して歎じて曰く、是なる哉、是なる哉。雪舟の骨、雪村の氣、亦之に外ならず。畫の要は一意直到、唯心裏の影を以て紙上の形となすに在り。意盡くる所は則ち筆の盡くる所なり。氣力満盈の間、豈一點の間筆を着くべけんや。是よりして筆墨を童子に與へ、白紙を以て其の畫く所に換へ、之を祕笈に藏し、夜靜

東(方)法(生)死(現象)

界(より)涅槃(に入る)法

と(東)リ(百)法(法)

真境

伯(り)朝

橋本雅邦

畫家

東京美術學校教

授

明治四十一年卒

年七十四

不思議(おも)もの(か)色(と)は
躍(り)出る。

怪物

賤(し)と(候)奴(に)倍(は)々(と)を(知)る

お

かに人定まる後、孤燈を剪つて之を展覽し、畫中の上乗禪に悟入する所あり。此の時に於て翁の心事を解し共に破格を期したるは、獨り橋本雅邦氏なりき。氏は翁と同日畫所に入る、時に年十三歳なりと云ふ。此の兩畫伯、一は雄拔奇豪、一は渾厚着實、共に表裏提挈し新畫の端緒を開きたるは亦奇縁といふべし。
心機漸く熟して、形相未だ成らず。新に生面を開きたる者の通弊として、忽ちにして奇僻に陥り、怪詭百出、滿幅の風雲魑魅魍魎を奔らせて、同門の嘲を招き、師家の罵に遭ひぬ。されど、翁自ら信ずる所あり、敢へて一步を退かざりき。憾むらくは世を舉つて俗陋、翁を知る者甚だ希なり。慘憺辛苦嘗めざるなく、其の死に先だつこと兩三年、始めて其の心機と形相と調和するを得て、畫法の自在を成したる者の如し。觀音其の他の傑作に至りて

未(だ)か(ら)蓮(華)の(香)を(含)む

(服)料

揮毫料・才礼

勝川

狩野勝川院雅信

木挽町狩野畫所

の八世

江戸の人

明治十三年歿

年五十八

は畫格遠く古大家に入り、人をして驚絶せしむるに足ると雖も、其の巧妙は既成の形相に非ずして、寧ろ含蓄にあり、未だ數蓮華の香を含み、秋雲の雷電を藏するが如し。惜しいかな、未だ大いに其の圓熟縱横の妙を揮ふに及ばずして逝く、年六十一。時に明治二十一年十一月五日なり。
翁人となり、内、忠實溫順にして、外、高邁俊逸なり。其の父母に至孝なるは郷閭の知る所にして、勝川門下に遊學したる時の如きは、一身節儉を守り、潤筆を得ても之を私せず、郷里に送り、以て父母旦夕の料に供したりと云ふ。技藝の上に在りては、虚心坦懐、好んで人に問ひ、門下子弟の説と雖も、苟も取るべきあれば、喜び拜して之を容れ、其の圖樣を改むること屢なり。其の自ら信じたる所を説くに至つては、貴賤親疎の別なく、長談雄辯して必ず

時平

然

意を盡さざれば已まず。翁又謠曲を愛し舞を好む。常に舞法の畫法と同一なる所以を説き、得意の事得意の人に遇へば、婆娑として起舞し、旁に人なきが若し。蓋し畫伯眼中唯畫あるのみ。顧ふに美術の大家たるものは自ら一家の美學を有するものなり。或は心に感じて口に之を言ふ能はざるものあり。或は默契して言ふを好まざるものあり。翁の如きは之を言ふを喜びたるものなり。翁は畫理を以て天地萬物の眞理を發明せんと試み、佛家禪僧の妙悟、漢儒西哲の深旨、總べて丹青鏡裏に照映して其の意義を判し、得失を論じ、仁義道德の大道、坐臥進退の庸行に至るまで、盡く取りて以て畫訣とせり。

翁常に言ふ、人生各自獨立の宗教（各人の確立）なかるべからず。美術家の宗教は美術宗あり。復何ぞ之を他に求めんや」と。亦以て其の造

詣を見るに足るべし。(國華)

九 菅原大臣

醍醐の帝の御時、時平の大臣、左大臣の位にて、年いと若くおはします。菅原の大臣は右大臣の位におはします。そのをり、帝御年いと若くおはします。左右大臣に世の政行ふべき宣旨下させたまへりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにや、おはしましけむ、共に世の政をせしめ給ひし程に、右大臣はさえ世にすぐれめでたくおはしまし、御心おきてもことの外にかしこくおはします。左大臣は御歳も若く、才もことの外に劣り給へるによりて、右大臣御覺えこと

藝能

の外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さる然る可べきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十五日太宰権帥になし奉りて流され給ふ。



(筆邦雅本橋) 眞道原菅

もおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君女君たち慕ひなきておはしければ、小さきはあへなむ。と公も許さしめ給ひしかば、共に率て下り給ひしぞかし。帝

この大臣、子ども數多おはせしに、女君たちは婿取し、男君たちは、皆程々につけて位ど

の御掟極めて生憎におはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣はさざりけり。方々にいと悲しく思召して、御前の梅の枝を御覽じて、

東風吹かば、にほひおこせよ、梅の花、

あるじなしとて春なわすれそ。

又亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれは水屑になりはてぬ、

君しがらみとなりてとどめよ。

なき事によりかく罪せられ給ふをからく思し嘆きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて。君がすむ宿の梢をゆくくと

クエ

しからみ

亭子の帝
宇多法皇
亭子院は京都七
條にあつた

山崎
山城國乙訓郡大
山崎村山崎

隠るゝまでもかへりみしはや。感動す。
また播磨の國におはしましつきて、明石の驛驛場といふ處に御宿り
せしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色様子を御覽じて作らせ
給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋。花咲く春心母葉落る秋あり。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さるゝ
夕べ遠方に處々煙立つを御覽じて、
夕されば、野にも山にもたつけぶり、

なげきよりこそもえはじめけれ。

また雲の浮きて漂ふを御覽じても、
山わかれとびゆく雲の歸り來る
かげ見るときぞなほ頼まるゝ。
思わるゝ

木一もえーけり
木一もえーけり
木一もえーけり

帝の長心
を推察せられた

大貳

太宰大貳藤原興

範

觀音寺

筑前國筑紫郡水

城村觀世音寺

太宰府の東二町

文集

白氏文集七十一

卷

白居易

字は樂天

盛唐の詩人

大中元年(二五七)

歿年七十一

詩を自ら分

丞相度年樂樂

志、今宵胸物自

然悲、聲寒縮縮

風吹處、葉落梧

桐雨打時、君富

春秋一臣漸老、恩

無、涯岸一報猶

迎、不知此意何

安慰、飲酒聽

琴又詠詩。

今宵の胸物も水も再が都に映るるやかと思われれどもありませう
ざりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゝへる水の底までも、
きよきこゝろは月ぞてらさむ。

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照し給
はめとこそはあめれ。

明月が外へ出られる。

筑紫におはします處の御門もかためておはします。大貳の居
處は遙かなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやら
れけるに、又いと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をさ

こしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓、纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲。

これは文集の白居易が遺愛寺鐘鼓枕聽、香爐峯雪撥簾看といふ
詩にもまさるまに作らしめたまへり。とこそ昔の博士どもは申

しけれ。

またかの筑紫にて九月十日の菊の花を御覽じけるついでに、
また京におはしまし、とき九月のこよひ内裏にて、菊の宴ありし
に、この大臣の作らせ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御
衣賜はせ給へりしを筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ず
るに、いとゞそのをり思召し出でて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼、

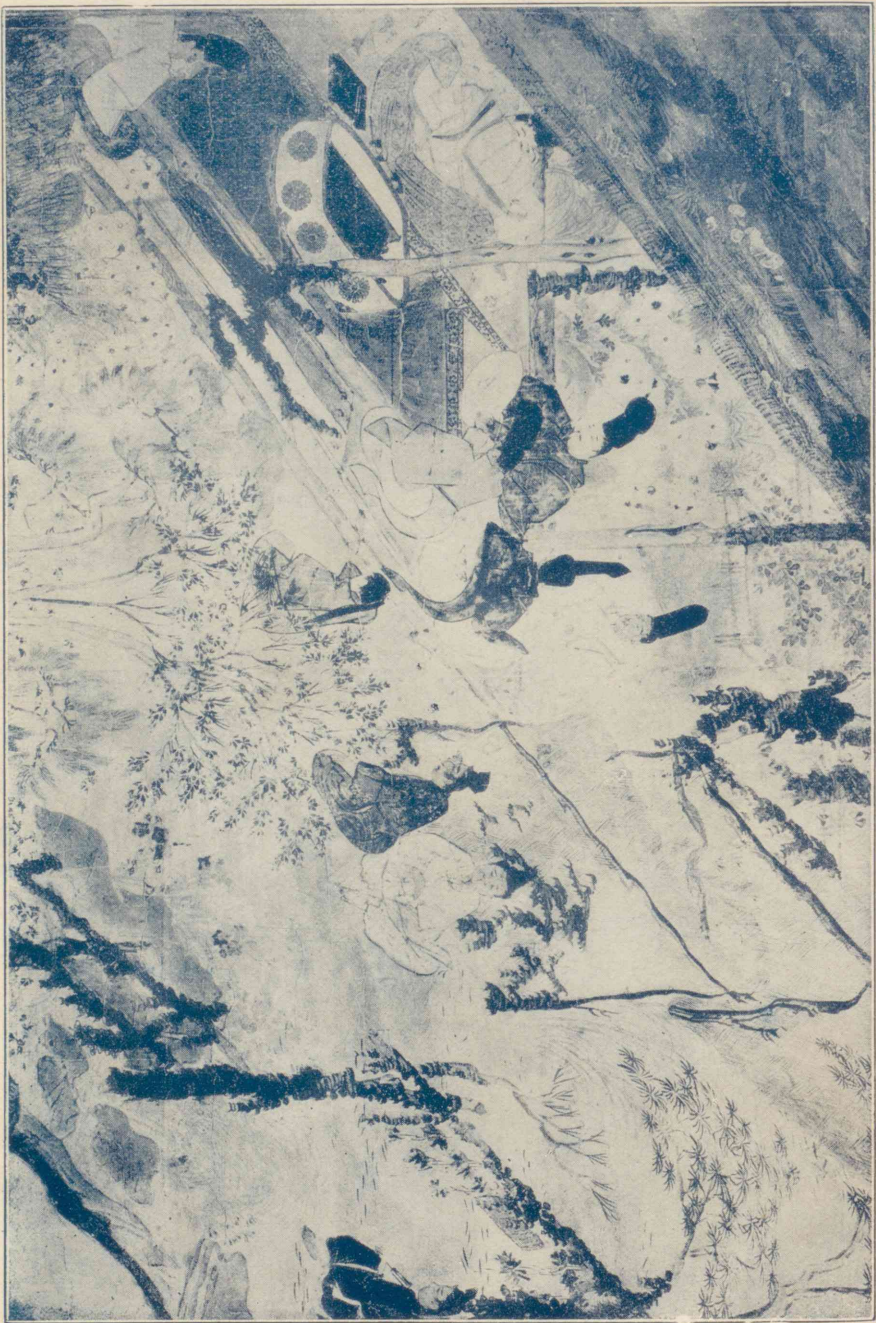
秋思詩篇獨斷腸

去年の秋思の詩を断つて

恩賜御衣今在此、
すかひて之捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく人々感じ申されき。

かくて、このおとゞは筑紫におはして、延喜三年癸亥二月二十五
日にうせたまひしぞかし。御年五十九。(大鏡)



眞道原菅の所配
(藏社神野北都京起縁野北筆實信原藤)

古今集の長
一技巧

紀友則

貫之の姪
生歿の年未詳

天慶九年(六六六)卒
年六十五

九月日

一〇 人はいさ

紀友則

枕詞

櫻の散るをよめる

ひさかたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿らで
ほどへて後にいたりければかの家のあるじかくさだ
かになんやどりはある」といひいだして侍りければそ
こに立てりける梅の花を折りてよめる

紀貫之

人はいさ心も知らずふるさと

花ぞ昔の香ににほひける

かき集(感)のまゝと表現
おのの浦の打ちあてりみれば

かこのうらむに西まらりり?

一〇 人はいさ

内侍のかみ
尚侍藤原滿子
右大將
右大臣右近衛大
將藤原定國
滿子の兄

凡河内躬恆
延喜七年(五七)
歿
年四十九

壬生忠岑
康保二年(六五)
歿
年九十六

春道列樹
歌人
壹岐守
延喜二十年(五八)
卒

志賀の山越
近江國滋賀郡滋
賀の里より山城
國愛宕郡白川村
に出る山路

内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に、
四季の繪かけるうしろの屏風に書きたりける歌

桐葉の吹く秋風吹くからに、と音を奏せ給て存るる。

聲うちそふる沖つしらなみ。

壬生忠岑

寛平の御時后宮の歌合の歌

みよしの山吉野の白雪ふみわけて

入りにし人の音づれもせぬ。

春道列樹

年のはてによめる

昨日といひけふとくらしてあすか川

ながれて早き月日なりけり。

志賀の山越にて石井のもとにてものいひける人の別

あすか川の
明日の
樹

方葉
の野

六仙
大伴

冬
大伴

只津仁一
五

八初
五

初行日

惟喬のみこ
寛平九年(一五七)
歿
年五十四

在原業平
元慶四年(一五〇)
卒
年五十六
秋仙

れける折によめる
紀貫之

水が濁るよるに
むすぶ手のしづくに
あかでも人に別れぬるかな。

紀友則が身まかりにけるときよめる

紀貫之

あす知らぬ我が身と思へど暮れぬまの

今日は人こそかなしかりけれ。

惟喬のみこの狩しける供にまかりて宿りに歸りて夜

一夜酒を飲み物語をしけるに、十一日の月も隠れなん

としけるをりに、みこ酔ひて内へ入りなんとしければ

在原業平朝臣

よみ侍りける
あかなくにまだきも月のかくる、か、

かりかたり感動

山のはにげて、入れずもあらなむ。（古今集和歌集）

作者不明

業平の可敬を中心として物語り
を作ったもの

（可敬物語）とある。

餉
餉
餉

八橋
三河國碧海郡牛
橋村八橋
刈谷驛の北一里
餘

二 業平朝臣の東下り
むかし男ありけり。その男身をえうなき物に思ひなして、京に
はあらし、東の方に住むべき國もとめにとて往きけり。もとよ
り友とする人、一人二人していきけり。道知れる人もなくて惑
ひ行きけり。三河國八橋といふ處にいたりぬ。そこを八橋と
いひけるは、水ゆく川の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるにより
てなむ、八橋とはいひける。その澤の邊の木の蔭にあり居て、餉
くひけり。その澤に燕子花いとおもしろく咲きたり。それを
見てある人のいはく、かきつばたといふ五文字を句の上にする

かう衣きまなれは

着なれてある事
鳴れたる妻

妻の序詞

古里はすすみ居れど
る女房か居るによ
つて、目分はア
いりて此の所へ
来た事かと思ふ。

折白

折白り各句の上を
着るもの
桂

掛
住なれし妻

宇津山
駿河國志太郡岡
部町の邊
静岡の西南四里



橋 八

て、旅のこゝろをよめ
といひければよめる、
から衣 枕言葉
きつなれにし
つま理あれば、
はるく、來ぬる
たびをぞ思ふ。
とよめりければ、みな
人餉の上に涙落して
ほとびにけり。
ゆきく、て駿河國に
いたりぬ。宇津山に

枕書一序詞一長一序詞一不定

宇津の山に居る。一見事はあまふか
巻も君が僕を思ふと云はれり。夢にも
現れり。さうに、世にも見ない。かき書り
思ひ物、不足なり。

鹽尻
鹽田で砂を圓く
積んで塚のやう
にしたもの

いたりて、わが入らむとする道はいとくらうほそきに、蔦かづら
はえしげり、物心ほそく、すゞろなるめを見ること、思ふに、修行
者あひたり。かゝる道にはいかでかいまするといふを見れば
見し人なりけり。京にその人のもとにとて、文書きてつく、
駿河なるうつの山邊のうつゝにも、

夢にも、人のあはぬなりけり。

富士の山を見れば、五月のつごもりに雪いと白う降りり。

時しらぬ山はふじの嶺、いつとてか、

かのこまだらに雪の降るらむ。

その山はこゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたら
んほどして、形は鹽尻のやうになんありける。

なほゆきく、武藏國と下總との中に、いと大きな川あり、そ

れを隅田川といふ。その川の邊に群れ居て思ひやれば、かぎり
なく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ、日
も暮れぬといふに、乗りて渡らむとするに、皆人ものわびしくて、
京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の喙と足と
赤き、鴨の大ききなる、水の上に遊びつゝ、魚を食ふ。京には見え
ぬ鳥なれば、皆人見しらず。渡守に問ひければ、これなむ都鳥と
いふを聞きて、

名にし負はゞいざことゝはむみやこ鳥、

わがおもふ人はありやなしやと。

とよめりければ、舟こぞりてなきにけり。(伊勢物語)

(後醍醐朝の東下り)

(南北朝の戦乱)

道行去 縁談

抄子 古歌

言葉の怪録

二三 落花の雪

落花の雪 叙懐也、思ふ交野のみの、櫻狩花の雪、春の曙
 交野 河内國北河内郡もと交野郡故方附近
 紅葉の錦 朝野だき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき (原公任)
 逢坂の關 京都から大津に出る道にあつた關所
 打出の濱 大津市の東南部うねの野
 近江より朝立ちくればうねの野に田鶴ぞなくなる明けぬこの夜 (古今集)

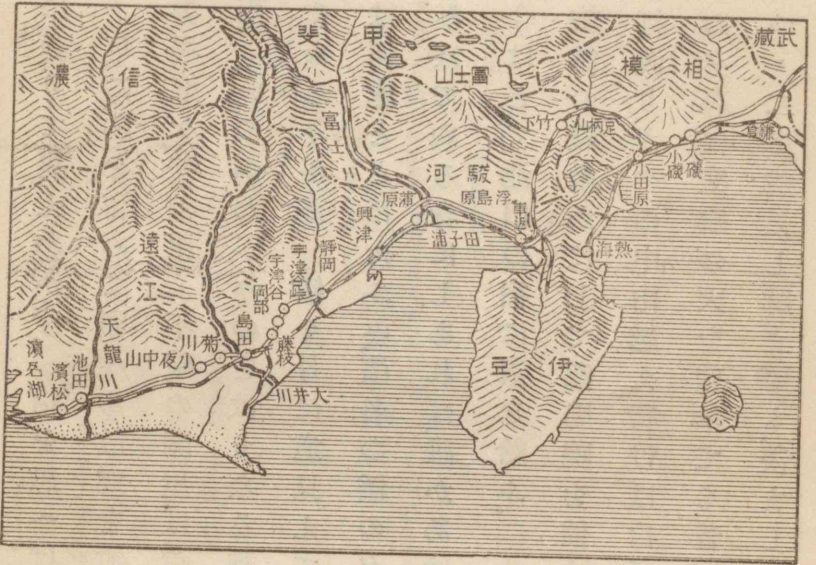
落花の雪に踏迷ふ交野の春の櫻狩紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮一夜をあかす程だにも旅寝となればものうきに恩愛の契淺からぬわが故郷の妻子をば行方も知らず思ひ置き年久しくも住馴れし九重の帝都をば今を限と顧みて思はぬ旅に出てたまふ心の中ぞあはれなる。
 憂きをばとめぬ逢坂の關の清水に袖濡れて末は山路を打出の濱 沖を遙かに見渡せば鹽ならぬ海にこがれ行く 身をうき船の浮き沈み 駒もとどろと踏みならす勢多の長橋打渡り行きかふ人にあふみぢや世をうねの野に鳴く鶴も子を思ふかとははれなり 時雨もいたくもり山の木の下露に袖ぬれて風に露散る篠原や篠分くる道を過ぎゆけば鏡の山はありとても涙

時雨も 白露も時雨もいたくもり山は下葉残らず色づきにけり (紀貫之)
 もり山 近江國野洲郡守山村
 篠原 同國同郡篠原
 鏡の山 同國蒲生郡鏡山村にある名山
 おいそのもり 同國同郡安土村の東にある老蘇杜
 番場 同國阪田郡南箕輪村番場
 醒ヶ井 同國同郡醒ヶ井村
 有名な泉がある 柏原 同國同郡柏原村 美濃の國境へ一里

に曇りて見えわかず 物を思へば夜の間にもおいそのもりの下草に駒を留めて顧みる故郷を雲や隔つらん 一番場醒ヶ井柏原 不破の關屋は荒れ果て、猶もるものは秋の雨 いつかわがみのをはりなる熱田の八劍伏し拜み、汐干に今やなるみがた 傾く月に道見えて明けぬ暮れぬと行く道の末は何處ととほたふみ、濱名の橋の夕汐に引く人もなき捨小舟沈みはてぬる身にしあれば誰かあはれとゆふぐれの晚鐘鳴れば、今はとて池田の宿に着き給ふ 旅館の燈幽かにして鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて天龍川を打渡り、さやの中山越え行けば白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が「命なりけり」と詠じつゝ、二度越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける 隙行く駒の

多々の年をて(手書)
小夜山を越えしは
昔も思ひわらふか
今日此ふ月と歸
るとは一命あつて
幸

不破の關
美濃國不破郡關
ヶ原村の内
なるみがた
小夜千鳥聲こそ
近くなるみ濁傾
く月に潮や滿つ
らん(藤原季能)
さやの中山
遠江國佐益郡
(今小笠郡)日坂
より榛原郡菊川
に至るまでの坂
命なりけり
年たけてまたこ
ゆべしと思ひき
や命なりけりさ
やの中山(西行)
隙行く駒
人生一世間如
白駒過て隙耳
(史記)
亭午
直午
正午
宗行卿
中御門中納言藤
原宗行

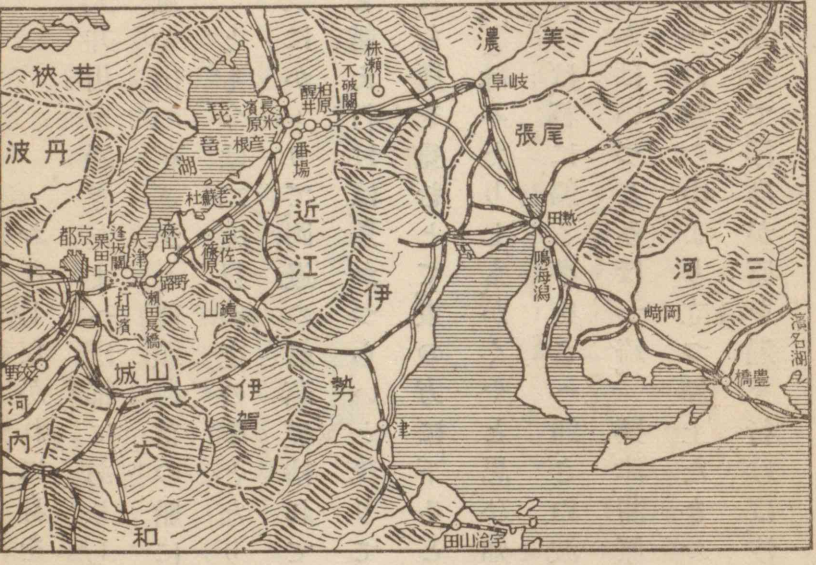


俊基朝臣

足早み、日巳に亭午にの
ぼれば、餉進らする程と
て輿を庭前に昇き止む。
轅を叩きて警固の武士
を近づけ、宿の名を問ひ
給ふに、菊川と申すなり。
と答へければ、承久の合
戦の時、院宣書きたりし
咎に因りて、宗行卿關東
へ召下されしが、此の宿
にて誅せられし時、
昔南陽縣菊水、
ま死

竹窟の解釋
形式の解釋

南陽縣
南陽縣有甘
谷。谷中水甘美。
上有天菊落
水、從山流下。
得其滋液。谷中
人家飲此水。上
壽百二三十。其
中百餘歲、七八
十者則爲天
(風俗通)



東下地圖

汲下流而延齡。
今東海道菊川、
宿西岸而終命。
と書きたりし遠き昔の
筆の跡、今はわが身の上
になり、あはれやいと
まさりけん、一首の歌を
詠みて宿の柱にぞ書か
れる。
いにしへも
かゝるためしを
きく川の

藤枝、舟、水、舟物、カキス、の、舟、水、舟物、木、舟、舟物

藤枝 駿河國志太郡藤枝町
岡邊 同國同郡岡部町
みほが崎 同國安倍郡三保村三保松原
興津 同國庵原郡興津町
清見關のあつた處 蒲原
蒲原 同國同郡蒲原町
上なきおもひ 富士のねの煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり (藤原家隆)
浮島が原 駿河國駿東郡原町の附近

同い場所が扱はれてありませう。
おなじながれに身をやしづめん。
大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひ續け給ふ。島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、蔦かづらいと茂りて道もなし。昔業平の中將の、住む所を覓むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守にいと涙を催され、向ふはいづこみほが崎。興津、蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見たまへは、雪の中より立つ鷹、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や浅き船浮きておりたつ

田子 袖ぬるゝこひ路とかつは知りながらおり立つ田子のみづからぞうき(源氏物語) 車返 今の沼津市の東部 黄瀬川の左岸 竹の下 駿河國駿東郡足柄村の内 御殿場の東一里 大磯小磯 相模國中郡大磯町 八波則吉 國文學者 第五高等學校教授 露伴 幸田成行 小説家 國文學者 文學博士 江戸生 慶應三年(二五七)生

田子のみづから浮世をめぐる車返。竹の下道行きなやむ足柄山の峠より大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮程に鎌倉にこそ着きたまひけれ。(太平記)

一三 一夜の神興

八波則吉

時に君、古い本だが「五重塔」は読みましたかね。まだ？ 度はお読みなさい。僕の本を貸しますから是非お読みなさい。これは僕の愛讀書です。君、文體は違つてゐますよ。同じ露伴物の中でも、これは格別古い方ですから、今日流行の小説とは非常に文體は違つてゐます

よ。併し、文體の如きは抑、末です。千石之体「ぞるこそそれで書いてあつても、源氏物語は矢張千古の傑作ですからね。」

え、著者に面會したことがあるかといふお尋ねですか。あります。

すとも、何度でもあります。露

幸 伴さんは謂はゞ布袋さん

田 いや、達磨さん見たやうな方で

露 す。斯うどしんと爐を切つた

伴 座敷の爐の前に坐つて、ねつち

りねつちり話されるところは

まるで禪坊さんです。恐しい凝性ゴウセイの方で、此の小説を書かれる

時には、——人傳に聞いたのですが、東京附近の五重塔を見廻つ

て、幾枚もくゝ机の抽斗一杯ほどの圖面を集めて、それでも満足



宮鷹寺の朗月
川越の源太が五重塔を作り、人傳が残さ
五重塔を作ることになった。
源太の弟子は十兵衛があつて塔を作
るべく努力した。(此の節)

谷中
東京市下谷區谷
中
天王寺の五重塔
がある

が出来ず、たうとう大工に模型を作つて貰はれたといふ事です。さうかも知れません。本文の中に大工の十兵衛が、

其こゝが詰り員かと決めたの夜からといふものは、眞實、眞實でござりまする、上人様、晴

れて居る空を見ても、燈光のとゞかぬ室の隅の暗いところを

見ても、白木造りの五重塔がぬつと突立つて見おろして居り

まするは。たうとう自分が造る氣になつて、到底及ばぬと知

りながら、毎日仕事を終ると直に夜のも寐ずに五十分一の

雛形をつくり、昨夜で丁度仕上げました。見に来て下され、御

上人様。

といふ所がありますが、これは其の儘著者露伴さんの熱誠と見

る事が出来ます。

まだ露伴さんが谷中に住んで居られた時の事ださうです。朝

夕五重塔を見て、天晴立派に建つたるものかな、あらか快き細工振りかな。稀有ぢや未曾有ぢやと朝日夕日に感嘆されてゐたさうですが、或年非常な暴風雨がりました。翌朝今朝こそ、若しや……と走り出て五重の塔を見られたさうです。ところが依然として、いや巍然として、金剛力士が魔軍を睥睨して十六丈の姿を現じ、軸坤軸動かず足ぶみして巖上に突立ちたるごとく釘一本ゆるがず、板一枚剝がれず突立つてゐたさうです。こゝに露伴さんは感奮して、是非此の五重塔の由來を書いて見ようと決心して、それから前に申したやうに材料蒐集に苦心して百五十頁足らずの「五重塔」に一箇年餘を費されたといふ事です。ところが君、面白い事がありますよ。本文の中に暴風雨の記事があります。一寸其の本を貸して見給へ……此處です、其の三

インスピレーション
イン
Inspiration

十三」です。「長夜の夢をさまされて江戸四里四方の老若男女、悪風來たりと驚き騒ぎ」以下です。飛天夜叉王が數萬の眷屬を指揮して暴威を逞しくする、實に凄慘極る、鬼氣人に逼る名文は、露伴さんが一夜の中に書かれたのださうです。彼の遅筆……といはれてゐる露伴さんが、これ程の名文を一夜の中に書かれたといふ誠に驚嘆すべき事實で、蓋し神興——「不斷の努力、愛の力の結晶ともいふべき靈感、即ちインスピレーションに依つて筆を運ばれたのであらうと想像します。(創作への道)」

一四 五重塔

幸田露伴

時は一月の末つかた感應寺生雲塔いよ／＼物の見事に出來上

り、世に珍しき塔供養あるべき筈に、支度とりくくなりし最中、夜半の鐘の音の曇つて常には似つかず耳にきたなく聞えしが、そもく、やうく怪しき風吹出して、眠れる兒童も我知らず夜具踏みぬぐほど、時候生暖くなるにつれ、雨戸のがたつく響はげしくなりまさり、闇に揉まるゝ松柏の梢に天魔テンマの號び、物凄くも、人の心の平和を奪へ、平和を奪へ。浮世の榮華に誇れる奴等の膽を破れや、睡を攪マシせや。愚物の胸に血の濤打たせよ、偽物の面の紅き色奪れ。斧持てる者斧を揮へ、矛もてる者矛を揮へ。汝等が鋭き劍は饑ゑたり、汝等の劍に食を與へよ。人の膏血はよき食なり、汝等劍に飽くまで喰はせよ、飽くまで人の膏賦を餌エサへ」と號令厳しく發するや、否や、猛風一陣どつと起つて、斧を持つ夜叉、矛持てる夜叉、饑ゑたる劍持てる夜叉、皆一齊に暴れ出しぬ。

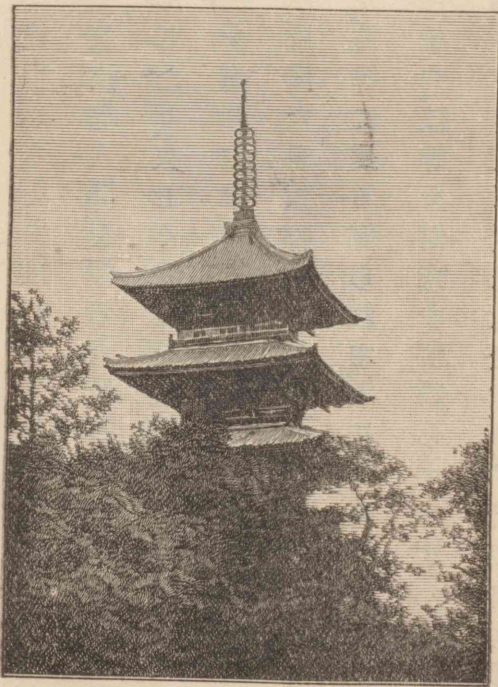
文政三年

明治三十四年

長夜の夢をさまされて江戸四里四方老若男女、惡風來たりと驚き騒ぎ、雨戸の横柄ヨコエ子しつかと挿せ、心張棒を強く張れ」と家々毎に狼狽ふるを、あはれとも見ぬ飛天夜叉王、怒號の聲音たけく、しう、汝等人間を憚るな、汝等人間に憚られよ。人間は我等を輕んじたり、久しく我等を賤しみたり、我等に捧ぐべき筈の定めサダメの牲シノを忘れたり。這ふ代として立つて行く狗、驕奢キョウシャの埒チ巢ネ作れる禽、尻尾なき猿、物言ふ蛇、つゆ誠なき狐の子、汚穢を知らざる豕イノシシの女、彼等に長く侮られて、遂に何時まで忍び得ん。我等を長く侮らせて、彼等を何時まで誇らすべき。忍ぶべきだけ忍びたり、誇らすべきだけ誇らせたり。六十四年は既に過ぎたり。我等を縛ムスせし機運キウンの鐵鎖、我等を囚コトへし慈忍ニギハヤの岩窟イワノは、我が神力カミツクリにてちぎり棄てたり、崩れさせたり。汝等暴れよ、今こそ暴れよ。何十

須彌山の頂りにある山

年の恨の毒氣を彼等に返せ、一時に返せ。彼等が驕慢オウリの氣の臭さを鐵圍山外カシヤノ山に擧んで捨てよ。彼等の頭を地につかしめよ。



塔五寺王天中谷京東

れ頭アタマかしめよ。彼等が膽に針を與へて、祕密ワケノ不明の痛みに堪へざらしめよ。彼等が眼前に彼等が生じたる多くの奢侈の子孫を殺

無慈悲の斧の刃
味の好さを彼等
が胸に試みよ。
慘酷の矛、嗔恚イナの
劍の刃糞カサと彼等
をなしくれよ。

彼等が喉に氷を
與へて、苦寒に怖

かちみぢぢく 深淵に沈めよ。
はの河に毒血を流して河に沈めて悲
してしまへ。身をまといれ。

して、玩物モノの念を嗟歎の灰の河に埋めよ。彼等は蠶兒サナヒの家を奪ひぬ。汝等、彼等の家を奪へや。彼等は蠶兒の智慧を笑ひぬ。汝等、彼等の智慧を讚せよ。すべて彼等の巧とおもへる智慧を讚せよ。大とおもへる意を讚せよ。美しと自らおもへる情を讚せよ。協ヨウへりとなす理を讚せよ。剛コウしとなせる力を讚せよ。すべては我等の矛の餌なれば、劍の餌なれば、斧の餌なれば、讚して後に利器キに餌エサひ、よき餌を作りし彼等を笑へ。なぶらるゝだけ彼等をなぶれ。急に屠ころるな、なぶり殺せ。活いしながら一枚一枚皮を剥ぎ取れ、肉を剥ぎ取れ。彼等が心臓を鞠として蹴よ。荆棘をもて背を鞭てよ。嘆息の呼氣、涙の水、動悸の血の音、悲鳴の聲、それらをすべて人間より取れ。残忍の外快樂なし。酷烈ならずば、汝等疾く死ね。暴れよ、進めよ。無法に住して、放逸無

慚、無理無體に暴れ立て、暴れ立て、進め、進め。神とも戦へ、佛をも
擲け。道理を壊つて壞りすてなば、天下は我等がものなるぞ。」と、
叱咤する度、土石を飛ばして、丑の刻より寅の刻卯となり辰とな
るまでも、毫も止まず勵まし立つれば、數萬の眷屬勇みをなし、水
を渡るは波を蹴かへし、陸を走るは沙を蹴かへし、天地を塵埃に
黄ばませて、日の光をもほとく掩ひ、斧を揮つて數寄者が手入
れ怠なき松を冷笑ひつゝ、ほつきと斫るあり、矛を舞はして板屋
根に忽ち穴を穿つもあり。ゆさくくと怪力もて、さも堅固
なる家を動かし、橋を揺がすものもあり。「手ぬるし、手ぬるし、酷
さが足らぬ。我に續け。」と、憤怒の牙噛み鳴らしつゝ、夜叉王の躍
り上つていらだてば、虚空に充ち満ちたる眷屬をたけび鋭くを
めき叫んで遮マツレケラ二無二、暴威を振ふ程に、神前寺内に立てる樹も、富

家の庭に養はるゝ樹も、聲振り絞つて泣き悲しみ、見るゝ大地
の髪の毛は恐怖に一々豎立なし、柳は倒れ、竹は割るゝ折しも、黒
雲空にながれて、檜の實よりも大きな雨ばらりゝと降り出
せば、得たりとますゝ暴るゝ夜叉、垣を引捨て、塀を蹴倒し、門を
もこはし、屋根をもめくり、軒端の瓦を踏み碎き、たゞ一揉に屑屋
を飛ばし、二もみ揉んでは、二階を捻ぢ取り、三たび揉んでは某寺
を物の見事に潰し崩し、どうくどつと関をあぐる其の度毎に、
心を冷し、胸を騒がす人々の、彼に氣づかひ、此に案ずる笑止の様
を見ては喜び、居所さへもなくなされて悲しむものを見ては喜
び、いよく圖に乗り、狼藉のあらん限を逞しうすれば、八百八町
百萬の人みな生ける心地せず、顔色さらにあらばこそ。折角わ
づかに出來あがりし五重塔は、揉まれゝて九輪は搖ぎ、頂上の

宴曲
鎌倉時代に行は
れた謠曲のもの

朗詠
漢詩漢文和歌の句を併せて
し歌りも。

掛言草をせし月
の法

山寺の
謠曲道成寺の句
を採清は

く、古語成句を補綴して成れるものなり。なほ宴曲の文の如し。四六文の變態が我が國文に及し、影響は即ちこゝにも認めらるゝなり。或は古歌を引き、或は朗詠の句を引き、或は佛典に取り、或は經書より採り、その五七の句たるや、全句悉く出典あらざるなく、巧に句尾を變化して、之を次の句に連接せしめ、文法上必ずしも整然たる秩序あるを要せず、唯語の縁を以て連接しゆくなり。故に前後に於ける矛盾は毫も顧慮せるところにあらず。例へば茲に雪といはんか、一切の古詩・古歌・故實・故事苟くも雪に關するものは列舉し去つて巧に之を連結するなり。場所と時間との統一を取るはもとより不必要なり。唯之を連結すれば足るなり。例へばかの、

山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞちりける。さる

杵臼夜白

月落鳥啼 霜滿天

江風漁火對愁 眠

姑蘇城外 寒山寺

夜半鐘聲到客 船

聲

唐詩人
張繼

程に寺々の鐘、月落ち鳥啼いて霜雪、天に滿ち、潮程なく日高の寺の江村の漁火愁に對して人々眠ればよきひまぞと

といふを見よ。春の夕暮と秋の曉と、落花と江楓と、山里と江上と、何等の矛盾ぞ。然れども一は有名なる新古今の佳什にして、一は有名なる唐詩人の佳作なり。いづれも鐘聲に關係あるを以て、こゝに引用せられざるべからず。作者創意の句はなくして、古人の成句を以て其の材料に供するが故に、語の上の聯絡をのみ思ひて、意の上の聯絡は考へざるなり。その聯絡なく、變轉するところに、却て多方面の興味は存在するなり。軍記物語の文にあらはれたる各種の時代特色はこゝにも皆すべて之を發見し得べきなり。

謠曲の文章の妙は其の舞樂が各種の舞樂を攝取集大成せるが

高砂

住吉明神の神徳をたへた曲

老松

筑前の安樂寺に參詣した者が老松の神靈に接すること

蟻通

紀貫之が和歌の徳によつて和泉の通明神の怒を和げたこと

玉井

彦父々田見尊が魚に取られた兄尊の針釣を取返しに龍宮にいかれて豊玉姫と契られる話

鶴龜

正月月宮殿で鶴

種類

神事

祝言

精霊

人事

本歌取
右人の歌を脱れし
大模倣せしもの

如く、和歌物語・今様・朗詠・宴曲及び戦記物語等一切の文を取入れて、之を補綴せるところにあり。已に人口に膾炙せる名句は之を聞くに於て詩的感興を惹くを以て、作者が創意の句を作るを要せず。要は傳來の名句を利用して、之によりて人の感興を惹かんとするなり。故に詩歌の句にして引用せらるゝものは、一曲毎に、一篇毎に、何回引用せらるゝをも厭はざるなり。これ本歌に近人の句を取るべからずといふに等しく、多く人口に膾炙せる句を求めたるなり。古句補綴の爲にはなるべくてにはを省かざるべからず。終局の語を略せざるべからず。之が爲にかけ詞を用ふること尤も多く、縁語を列ね、道行文を作る等なるべく短き間になるべく多くの語句事實を連接して、其の聯想の多趣多味ならんことを期したるは、修辭上の技巧として一進歩

と龜を舞はせる

こと

羅生門

渡邊綱が羅生門の鬼と戦つてその片腕を取るこ

七騎落

源頼朝が石橋山に敗れて主従七騎舟で落ちゆくこと

安宅

辨慶の才覚で源義經が安宅の關を事なく通り得たこと

俊寛

鬼界島に流された藤原成經平康類は赦されて俊寛一人島に取殘されること

と見做さざるべからず。諸曲には神事に關係あるもの多く、神社の縁起、祭禮の由來、神徳の靈驗等を示せり。高砂、老松、蟻通、玉井、是なり。太古の神話を根本とせるもの尠なからざるを思へば、其の由來は頗る舊き者なるべし。今日の里神樂は全く無言にして、多く太古の神話傳説を其の材料とす。是恐らくは能樂の遺物に非ずして、能樂以前前の形式ならんか。又單に祝言の能として太平を謳歌する鶴龜の如きものあり。歴史上の事實を材料とせるものには、羅生門、七騎落、安宅、俊寛の類あり。これらはすべて普通の演劇の如く、過去の事件を今日の舞臺の上に示すものにして、叙事詩にて讀み、琵琶樂にて聽けるものを、具體的に人物を以て舞臺の上に現はしゝものゝみ。

然るに其の神佛の靈驗をいふや、後人が面アヘり昔の姿を見るが如く作り出せるものあり。神は最初人モノとして現れ、現アヘに其の功德を示し給ふ事を主とす。當社の深秘委しく御物語り候へ。といふにつれて、縁起を語り、忽ち消え失するなり。即ち神佛の化現アヘしたまふなり。こゝに於てシテは前後二様となる。余は之を名づけて複式能といふ。この複式能の形式は最初の神事祝言の簡單なる能にも應用せられ、むかしの單純なる能の多くは、いつしか此の形式に變化せるならんと信ず。單式の能今は少なくして、大方複式能なればなり。而して能の特色價値は全くこの複式能の上に存するものといはざるべからず。之を英雄傳説に應用したるものは、即ち幽靈能となれり。英雄佳人の魂魄タマシは尙中有モノに迷ひ、老翁山賤オウサンヤクとして若しくは老媪賤女オウバヤクとしてあら

八島(義經)
前(義經)
後(義經)

はれ、最後に其の在世の時の英雄佳人とあらはるゝこと、神の一旦人と化現して後に其の正體を現し給ふと全く同一轍ワゴに出づ。こゝに於ては、通常の歴史劇の上に幽靈を附加したるものにして、全篇の活動は幽靈の活動となり、必ず前シテ後シテ人路(神様)の二部に分る。故に神事能に於ては現世界に人間ならぬ神を現じ、英雄能に於ては現世界の幽靈によりて古人に接するなり。此の如く、單に史劇として今日より神代を想像し、過去を想像し、その事業を再現するのみならず、現在の世亦まのあたり神を見、古人に接することを得しむる者は即ち謠曲の他の舞樂と異なる所以にして、幸若舞及び田樂等に無かりしところなり。謠曲の特色はこゝに在り。妙味も亦こゝに存す。その他を壓倒して大に行はれし所以もこゝに在るべく、謠曲の説教的なる所以も亦

こゝに在り。遂には草木の如き非情物の精靈も亦現れ出でて佛果を得るを説き、鬼神天狗の如き人間界ならぬものも出て來り、靈魂の未だ悟らずして、中有に迷ふものが法を聽いて解脱頓悟すると同じく、鬼神天狗も遂には法力に敵し得ずして調伏降服せらるゝを示す。近古文學の說教的傾向あるは軍紀物語に於て已に然り。こゝに至りては全篇は即ち巧妙なる一種の說教となれり。而して世話物ともいふべき夫婦兄弟親子の愛を叙べたるものは後世の演劇發達の逕路を示すものとす。謠曲の特色は幽靈能に在り、余が所謂複式能に存するが如し。複式能の大體の形式に就いていはんか、まづ現世の一人を出す。例へば一行脚僧あり、諸國一見若しくは雲水行脚イロリアルクの序によりて故事に縁ある場所に至り、行き暮れて一夜の宿を求めんとす。

こゝに於てその地の故墳、トウバ率塔婆カウマキ又は名木等よりその地の由緒ある地たることをおもひ起さしむ。世外の僧と一頭陀と古英雄の故蹟と、その對照已に妙なり。況や一夜の宿を借らしむるをや。しかも其の宿の主人公たる人は即ちその英雄佳人が魂魄のしぼし世に出てたるものにして、名もなき樵夫漁人と語りきとおもふ其の人は忽ち消え失せて、一轉して古の佳人英雄と語る。人をして現世より直ちに過去の世に入らしめ、古人と眼前に應答對話せしむるのみならず、未來の解脱をいふに於て、人を未來世に導き、生死變化の多ク、いふ有爲轉變人生の泡沫夢幻に等しく榮華富貴夢の如きを感じしむると同時に佛法の教理の至大なるを知らしむるなり。而してかくの如く前後のシテを以て複式となせる所以は半ばは後のシテに於て舞容を示さんとする技術上の目的に出

づるなり。謠曲は飽くまでも佛教的なり。全篇は一の説教なりといふを得べし。一切の傳説・歌話・物語・戦記物語は擧げて佛教の中に攝取せられたるなり。あらゆる豪傑もしくは佳人を擧げて行脚僧の解説に任せたるなり。天魔も鬼神も皆佛力に敵し得ず、草木國土一切成佛を遂ぐるなり。抑軍記物語の平家物語を見よ。開卷は祇園精舎の鐘の聲を以て始れり。源平盛衰記といふ書名も亦偶然の事にあらず。佛教が近古文學の根柢をなすは言を待たざる所にして、驕る平家の久しからざる榮華は悽愴なる琵琶の音に合せられて、武人の感興を惹くこと多かりしもの。いまや現在の雲水僧と會せしめて、解脱得道せしむといふ點に於て一層その感動を深からしめたるなり。詮ずるに人生の夢

幻に等しく、盛者必衰の理を知らしめんと欲するに非ざるはなし。盛者必衰の理を示すには、多くは過去の偉人を採れり。著名なる歴史上の人物は一層その對照の感を深うするに足るが故なり。而してさまざまに歴史的ならざる世話物に於ては、主として人生の愛別離苦を歌へり。親子夫婦の生別を根本とし、もしくは不和・讒言等の爲に起れる家庭或は社會上の悲惨事を寫し、悲歌の極、狂亂に陥るもの多し。しかも其の最後に於ては佛神の加護の爲に再會邂逅の幸福に終るを常とす。人生はもとより常住ならず、盛者必衰を悟らざるものは妄執永く去らず。會者定離を思はざるものは狂ならざらんと欲するも能はず。過去・現在・未來にわたりてこの理を示さんと欲するは謠曲の時代物・世話物に通じての主想なり。故に妄執の未だ去らざる古

シテ 佐野源左衛門
 ツレ 門出常世
 ツレ 常世妻
 ツレ 最明寺入道
 ツレ 時頼
 ツレ 時頼侍
 者 者
 狂言 時頼從者
 處 前は上野國
 佐野
 後は鎌倉
 信濃なる
 信濃なる淺間の
 獄に立つ煙遠方
 人の見やは咎め
 ぬ (伊勢物語)
 大井山
 信濃國北佐久郡
 大井庄にある山
 か
 大井は岩村田附
 近
 ともの里
 同國南佐久郡伴
 野庄
 野澤町附近

英雄佳人の未死の魂魄は行脚僧の弔慰によりて解脱成佛し、人生の愛別に亂れたる親子夫婦の苦衷は佛知識の力によりて、始めて圓滿幸福の境遇に轉ず。その慰安を得るや同一なり。故に謠曲を以て狂言に對すれば正に悲劇喜劇の兩方面を代表すといふべけれど、謠曲の悲壯美は實に決して悲酸的のものにあらず、佛果を得て圓滿なるを終局とするなり。(國文學史概論)

二六 鉢の木

ワキ次第行方定めぬ道なれば、來し方も何處ならまし。詞「是は一所不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづこの度は鎌倉に上り、春になり修行に出て

離れ坂
 同國北佐久郡輕井澤と香懸との間にある
 うすひ川
 碓氷川
 碓氷峠から出て東流して烏川に入る
 板鼻
 上野國碓氷郡板鼻町
 高崎市の西二里
 佐野
 上野國群馬郡佐野村
 笑止や
 困つたな
 雪は鵝毛に
 唐の白樂天の句
 細布衣
 みちのくの細布衣程せばみ胸あひがたきこひもするかな
 (袖中抄)

ばやと思ひ候。」道行 信濃なる淺間の獄に立つ煙遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣のうすひ川、下す筏の板鼻や、佐野の渡わたりに着きにけり。ワキ詞「急ぎ候ほどに、上野の國佐野のわたりに着きて候。あら笑止や、又雪の降りて來りて候。此の處に宿を借らばやと思ひ候。いかに此の屋の内へ案内申し候。」ツレ詞「誰にてわたり候ぞ。」ワキ「是は修行者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。」ツレ「易き御事にて候へども、主の御留守に候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。」ワキ「さらば御歸りまで是にて待ち申さうずるにて候。」ツレ「それはともかくもにて候。わらは、外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。」シテ「あゝ降つたる雪かな。如何に世にある人の面白う候らん。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氈を衣て立つ

て徘徊すと云へり。されば今ふる雪ももと見し雪にかはらねども我は鶴氅を衣て立つて徘徊すべき袂も朽ちて袖せばき細布衣みちのくのけふの寒さを如何にせん。あら面白からずの雪の日やな。あら思ひよらずや。此の大雪に何とて是にたゞずみて御入り候ぞ。ツレさん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、御留守の由申して候へば、御歸まで御待ちあらうずる由仰せ候程に、是まで参りて候。シテ、扱その修行者はいづくに渡り候ぞ。ツレあれに御入り候。ワキ我等が事にて候。未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘れて候程に、一夜の宿を御貸し候へ。シテ、易き御事にて候へども、あまりに見苦しく候程に、御宿は叶ひ候まじ。ワキいや〜見苦しきは苦しからぬ事にて候。平に一夜を御貸し候へ。シテ、留め申したくは候へ

ども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候程に、中々御宿は思ひもよらぬ御事にて候。是より十八町あなたに、山本の里とてよき泊りの候。日も暮れぬさきに、一足も早く御出で候へ。ワキ扱はしかとお貸しあるまじいにて候か。シテ、御痛はしくは存じ候へども、御宿は参らせ難う候。ワキあら曲もなや。由なき人を待ち申して候ものかな。

ツレあさましや、我等かやうに衰ふるも前世の戒行拙き故なり。せめては、かやうの人に値遇申してこそ後の世の便ともなるべけれ。然るべくは御宿を参らせ給ひ候へ。シテ、詞「左様に思し召さば何とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御出で候まじ。某追つ附きとめ申し候べし。のう〜旅人、御宿参らせうのう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛は

三輪
大和國磯城郡三輪町

しの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行き方を失ひ、ひとゝころに佇みて、袖なる雪を打拂ひくし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。『駒とめて袖うちはらふ蔭もなし、佐野の渡の雪の夕暮。』かやうに詠みしは大和路や三輪が崎なる佐野の渡。地是は東路の佐野の渡の雪の暮に迷ひつかれ給はんよ、見苦しく候へども、一夜は泊り給へや。『歌』げに是も旅の宿假初ながら値遇の縁。一樹の蔭の宿りも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒舊りて、うきねながらの草枕夢より霜や結ぶらん。
シテ、いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、参らせうずるものもなく候はいかに。ツレ詞、折節これに粟の飯の候程に苦しからずば参らせられ候へ。シテ、されば其の由申し候べし。

盧生
支那の趙の都邯鄲で盧生といふ少年が道士呂翁の枕を假りて晝寢をして粟飯の出来るのを待つ間の夢に立身して大臣となり趙國公に封ぜられて五十年の榮華を極めた

いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、何にても参らせうずるものもなく候。折節これに粟の飯のある由申し候。苦しからずば聞し召され候へ。ワキ詞、それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。シテ、のう聞し召されうずると仰せ候。急いで参らせられ候へ。ツレ、心得申し候。シテ、總じて此の粟と申すものは、古へ世にありし時は、歌に詠み詩に作りたることをこそ承りて候に、今は此の粟を以て身命を繼ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年。其の邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも、粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれや、げに我もうちも寐て夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、のう御覽ぜよ、かほどまで地住みうかれたる故郷の松風さむき夜もすがら、寐られねば夢も見ず。何思ひ出のあるべき。」

シテ詞「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあて参らせ候べき。や、思ひ出したる事の候。鉢の木を持ちちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。」ワキ詞「げにげに鉢の木の候よ。」シテ「さん候。某世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集めもちて候ひしを、かやうの體に罷りなり、いや〜木ずきも無用と存じ、皆人に参らせて候。さりながら、今も梅櫻、松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜のおもてなしに、之を火に焚き、あて申さうずるにて候。」ワキ「いや〜是は思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然又お事世に出て給はん時の御慰みにて候間、なかなか思ひもよらず候。」シテ「いや、とても此の身は埋木の花咲く世に逢はんこと今此の身にては逢ひがたし。」ツレ「唯いたづらなる鉢

仙人

阿羅邏仙人

迦羅邏仙人

雪山

ヒマラヤ山

窓の梅の

池凍東頭風度解

窓梅北面雪封寒

(朗詠集藤原篤

茂)

見じといふ

山里の折掛垣の

梅の花いかなる

人の見じといふ

らむ

(菅原道真)

かゝり

蹴鞠をする處に
植ゑた木

の木を、御身の爲に焚くならば、シテ「是ぞ誠に難行の法の薪と思し召せ。」ツレ「しかも此の程雪ふりて、シテ「仙人に仕へし雪山せだまの薪ツレ「かくこそあらめ。」シテ「我も身を、地捨人のための鉢の木。切るとてもよしや惜しからじ。」と雪うちかはらひて、見れば面白や、いかにせん。先づ冬木より咲きそむる窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、異木よりまづ先だてば、梅を切りや初むべき。見じといふ人こそうけれ、山里の折りかけ垣の梅をだに情なしと惜しみしに、今更薪になすべしとかねて思ひきや。櫻を見れば春ごとに花すこし遅ければ、此の木やわぶると心をつくし育てしに、今は我のみわびて住む家櫻きりくべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテ「扱松はさしもげに地枝をため葉をすかして、かゝりあれと植ゑ置きし其のかひ今は

あらし吹く松はもとより煙にて薪となるもことわりや。切りくべて今ぞ御垣守衛士の焚く火はお爲なり。よくよりてあたり給へや。」

ワキ「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。」シテ「御出でにより我等も火にあたりて候。」ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ。承りたく候。」シテ「いや、某は名字もなき者にて候。」ワキ「何と仰せ候とも唯人とは見え給はず候。自然の時のためにて候。なにの苦しう候べき。御名字を承り候べし。」シテ「此の上は何をかつゝみ候べき。これこそ佐野源左衛門尉常世がなれるはてにて候。」ワキ「それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候。」シテ「其の事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となりて候。ワキ「のう、それはなにとて鎌倉へ御上り候ひて、其の

御沙汰は候はぬぞ。」シテ「運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。かやうにおちぶれては候へども、御覽候へ、是に武具一領、長刀一えだ、又あれに馬を一匹つないで持ち候。これは只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも此の具足取つて投げかけ、錆びたれども長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ、着到につき、さて合戦始らば、地敵大勢ありとても、一番にわつて入り、思ふ敵とよりあひて、死なん此の身の此のまゝならば、いたづらに飢につかれて死なん命、なんぼう無念の事さふぞ。」

よしや身の
なほ頼めしめじ
が原のさしも草
われ世の中にあ
らんかぎりは
(清水觀音の御
歌)

論議ワキ「よしや身のかくては果てじ、只頼め、われ世の中にあらんほど、又こそ参り候はめ。暇申して出づるなり。」シテ「レ」名残をしの御事や。始めはつゝむ我が宿のさも見苦しく候へど、しばしは

留り給へや。」「ワキ」留る名残のまゝならば、扱いくたびかゆきの日の二人「空さへ寒き此の暮に、ワキ」いづくに宿をかりごろも、二人「今日ばかり留り給へや。」「ワキ」名残は宿にとまれども、いとま申して、二人「御出でか。」「ワキ」さらばよ常世。」「二人」また御入り。」「地」自然鎌倉に御上りあらば、お尋ねあれ。けうがる法師なり。かひくしくはなけれども、公方（ぼうほう）の縁になり申さん。御沙汰捨てさせ給ふな。」「といひすて、出船のともに名残や惜むらん。

後（のち）シテ「いかに、あれなる旅人。鎌倉へ勢の上るといふはまことか。何夥しく上る。さぞあるらん。東八箇國の大名小名思ひくゝの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる絲毛の具足に、金銀を展べたる太刀かたな飼ひに飼うたる馬にのり、乗替中間きらびやかに、打連れ打連れ上る中に、常世が常に變りたる馬

武具（ぶぐ）や打物の物その物にあらざる氣色、さぞ笑ふらん。さりながら、所存は誰にも劣るまじ。」「と、心ばかりはいさめども、いさみかねたる瘦馬のあら道おそや。地「急げども、弱きに弱き柳の絲の、シテ「よれによれたる瘦馬なれば、地「うてどもあふれども、先へは進まぬ足弱車の乗り力なければ追ひかけたり。

ワキ「いかに誰かある。」「ツレ」御前に候。」「ワキ」國々の軍勢どもは、皆々來りてあるか。」「ツレ」さん候。悉く参りて候。」「ワキ」其の諸軍勢の中にいかにもちぎれたる具足を着さびたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ來れと申し候へ。」「ツレ」畏つて候。いかに誰かある。」「狂言」御前に候。」「ツレ」君よりの御誕には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を着さびたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋

ねて、御前へ参れとの御事にて候。」「狂言、畏つて候。いかに申し候。」「シテ、何事にて候ぞ。」「狂言、いそいで御前へ御参り御へ。」「シテ、何と某に御前へ参れと候や。」「狂言、中々の事。」「シテ、あら思ひもよらずや。定めて人たがへにて候べし。」「狂言、いや、其方の事にて候。其の子細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれて参れとの御事にて候が、見申せば其方ほど見苦しき武者は候はぬ程に、扱申し候。急いで御参り候へ。」「シテ、何と。たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に参れと候や。」「狂言、中々の事。」「レテ、扱は某が事にて候べし。畏つたると御申し候へ。」「狂言、心得申し候。」「シテ、げに、是も心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前に召出され、頭を刎ねられたためな。よし、それも力なし。い

で、御前に参らん。と大床さして見わたせば、地、今度の早打に上りあつまる兵、きら星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、其の外數人並み居つ、目をひき指をさし、笑ひあへる其の中に、シテ、横縫のちぎれたる地、ふる腹卷に、鑄長刀、やう／＼に横たへ、わるびれたる氣色もなく、参りて御前に畏まる。



鉢の木の(筆漁耕卷坂)

ワキ詞「やあ。いかにあれなるは佐野源左衛門尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ鎌倉に御大事あるならば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参すべき由申しつる言葉の末を違へずして参りたるこそ神妙なれ。先づ先づ今度の勢づかひ、全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か偽か知らん爲なり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつて其の沙汰致すべき所なり。先づく沙汰の始めには、常世が本領佐野の莊三十餘郷返し與ふる所なり。又何よりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし志をばいつの世にかは忘るべき。いで其の時の

鉢の木は、梅松櫻にてありしよな。其の返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合せて三箇の莊、子々孫々に至るまで相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へ賜ひければ、シテ常世は之を賜はりて、地常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ。始め笑ひし輩も、是ほどの御氣色さぞ羨ましかるらん。地「扱國々の諸軍勢皆御暇賜はり、故郷へとぞ歸りける。シテ」其中に常世は、喜の眉を開きつゝ、今こそ勇め、此の馬に打乗りて、上野や佐野の舟橋とりはなれし本領に安堵して歸るぞ嬉しかりける。(觀世流謡曲)

上田敏
 英文學者
 京都帝國大學教
 授
 文學博士
 東京生
 大正五年歿
 年四十二

一七 法の夕

上田敏

ビザンチン
 三三〇年コ
 ンスタンチ
 ノーブルに
 都したビザ
 ンチウム即
 ち東羅馬帝
 國に發達し
 た建築繪畫
 の様式
 Byzantine

夕日の國は野も山もその「平安」や「寂寥」の
 黝くろの色の毛布けふもて掩おほへる如く物寂びぬ。
 萬物總べてとゝのほり、折目正しく、ぬめらかに、
 物の象かたちも筋目よく、ビザンチン繪の式かたの如。

時雨村雨、中空を雨の矢數につんざきぬ。

見よ、一天は紺青の伽藍の廊の色にして、

今こそ時は西山に入日傾く夕まぐれ、

日の金色は烏羽玉の夜の白銀まじるらん。

目路の界に物もなし、唯遠長き並木路、

路に沿ひたる檜の樹は、巨人の列つらの佇立たふまじ、

疎らに生ふる帚木や新墾小田の末かけて、

鋤休めたる野らまでも領ずる顔の姿かな

木立を見れば沙門等が野邊の送の營に、

夕暮がたの悲みを心に痛み歩むごと、

また古の六部等が後世安樂の願かけて、

靈場詣杖重く、番の御寺を訪ひしごと。

赤々として暮れかゝる入日の影は牡丹花の、

眠れる如くうつろひて、河沿馬道かど開けたり

噫、冬枯や、法師めくかの行列を見てあれば、

たとしへもなく靜かなる夕の空に二列ふたはら。

六部
 六十六部の略
 法華經六十六部
 を寫して日本六
 十六國を廻り國
 國の靈場に一部
 づつ獻納したこ
 とより起つた名

閻浮提金

佛敎でいふ
閻浮といふ
樹の下に流
れる河の底
から出る金
沙

Jambunadasuvarna

藤岡作太郎

國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
明治四十三年歿
年四十一

瑠璃の御空の金砂子、星輝ける神前に、
進み近づく夕づとめ、ゆくてを照す星辰は
壇に捧ぐる御燈明の大燭臺の心にして、
火こそ見えけれ、その棹の閻浮提金ぞ隠れたる。

(上田敏詩集)

一八 歌人西行

藤岡作太郎

西行何者ぞ。天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と
齊しくし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加も
あるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲亦

山家集
二卷
西行の家集

北面
院の御所に仕へ
る侍

憲康
傳未詳
鳥羽殿
京都の南二里下
鳥羽にあつた院
の御所

定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれど
も、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の
名今に噴々たるは、抑、何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。
代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術を善くす。和
歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の
士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せん
とす。されど、義清は名利を喜ばずして常に厭離の志あり。そ
の出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲
康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參
朝せんとして約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内
は泣き悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死し

嵯峨 京都の西の山里
 保延六年 崇徳天皇の御世
 (1136)
 右幕下 右近衛大將源頼朝
 大師 弘法大師
 桑門 梵語
 Sramana 沙門も同じ
 出家して修行する者
 抖擻 梵語
 Dhūta 頭陀
 衣食住の欲を捨てること

給へり。』とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、棄、恩入、無爲。』は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがれるを思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛着の絆を斷つはじめぞと顧みもせて家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せり。』と。かくて、名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。』と。一个の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を

四番 左持
 雨中野草 春さめのふりそめしよりのへ見れはふかみとりにもなりにけるかな
 右 しめしめといろますあめのふりそへはふかみとりなるのへの草かな
 高尾 山城國葛野郡高尾山神護寺
 文覺 俗名遠藤盛遠
 法華會 法華經を講説し讚歎する法會

友とし、優游自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事
 左持 西行法師
 西行法師筆蹟 (東京帝室博物館藏)
 あるべからず。數寄を立て、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。』と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参りあひて花の蔭など眺め歩き、坊に

涅槃

Nirvāna

梵語
悟道の究竟
地で生死を
脱した境涯
轉じて死滅

來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ」と問へば、「西行と申す者」といふ。
手覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。
暫しまもりて、「年頃承り及びたるに、御尋悦びいり候」とて、迎へ入
れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、
手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしか
ば、「日頃の仰に違ひたるは」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いひ
がひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か、
文覺をこそ打たんずるものなれ」といへりとぞ。
西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを
思ひて詠じて曰く、

ねがはくは花のもとにて春死なん、

そのきさらぎの望月のころ。

雙林寺

京都東山圓山公
園の南にある天
台宗の寺

建久元年

後鳥羽天皇の御

世
(一八五)

宗祇

飯尾氏

連歌の宗匠

紀伊國生

常に諸國を行脚
した

文龜二年(三三三)

歿
年八十二

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建
久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集め
たるもの即ち山家集なり。
わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無
二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに
三人、西行、宗祇、芭蕉是なり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁
亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉
は元祿泰平の機に乗じてまた西行、宗祇が行狀を慕ひしものと
す。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧
に正風の眼を開きし偉人、おのゝその道に一期を劃せし三家
がいづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅
行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

そもく平安朝の貴紳淑女は鴨桂二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の経過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、従つて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想、辭句の工にも、おのづから典型を生じて、天真を忘る。實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その内容は空しく、滔々として風を成せる時、西行ひとり蹶起して従來蹈襲せし典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところは萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇徳院の御

製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠じ給へることの、世上一般の題詠と撰を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ一も古人の粉本を摸倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、また宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨て、直に自然の堂奥に入らんとす。深く山川草木を愛してこれを視ること、猶己を視るが如く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見ん、老木は花もあはれなり、

いまいくたびか春にあふべき。

こゝにまた我が住みうくてもうかれなば、

松はひとりにならんとすらん。

同情は進んで愛着となりぬ。西行は官祿を捨てたり。妻子を捨てたり。すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。おのづから花なき年の春もあらば、

何につけてか日を送らまし。

うちつけにまた來ん秋の今宵まで、

月ゆゑ惜しくなる命かな。

愛着は迷なり、この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと雖も山水もと無心にして人間の如き魔性を有せず、これを以て窓前日夜の友とす、清澹虚無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に従うて轉ずること水の如し。來往自在、ここに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。今更に春を忘るゝ花もあらじ、

安く待ちつゝ今日もくらさん。

雲にたゞ今宵の月をまかせてん、

厭ふとしてしもはれぬものゆゑ。

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども、

月を友にてあかすころかな。

今よりは昔がたりは心せん、

あやしきまでに袖しをれけり。

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籁吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦強し。時

に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰已まざらしむるなり。

(國文學全史)

上田秋成

大阪の人

京都に住む

國學者

文化七年(一四七〇)

歿

年七十八

文治そのの年

文治二年(八四六)

鎌倉の大將

右近衛大將源頼朝

朝

鶴が岡

相模國鎌倉町鶴岡八幡宮

一九月の前

上田秋成

文治そのの年八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣てさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前おひ、御あとべつかうまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴のあゆみして、疾からず遅からず、つらを亂さずねり出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、かしこみたいまつれる人数多あるに、お前拂ひして、あなただにいはせず、世にいかめしく貴き御有様なり。かへりまをし、て御手輿に

穴熊の

西伯將獵。トレ

之。曰、非レ龍非レ

彫、非レ熊、非レ

麗。所レ獲霸王之

輔。果過二臣尙

於渭水之陽。

(史記)

菟姑射の山

仙人の居る山

菟姑射山有神

人居焉。肌膚

如二氷雪二綽約

若二處子(莊子)

轉じて仙洞御所

召させ給ふほど、御階の忌垣のもとに畏りをる法師のあなるが、見上げ奉る面つき、なほ人ならずと思しけん、御輿ぞひの若侍して問はせ給ふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申す。といふ。聞召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲物の類ならで、賢き人得たるためしに、誘ひかへらん。わがあとに連れて來れ。とて召連れさせ給へり。

御館に入らせられ、御装束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照しかゞやかせ給ひて、おまし近き處の一間なる簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔菟姑射の山の宮仕せし人の、世をはかなきものに思ひなして、身は黒うやつれたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞知りたるぞ。弓取る

大風起り
大風起兮雲飛揚、威加四海內、
兮歸故郷。安得猛士兮守四方。(漢高祖)
鳥鵲のに
月明星稀鳥鵲南飛 (魏曹操)

人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことか。武士のあら／＼しき心には詠みうつし得まじきものに宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛鼓の音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには心の後るゝはいかに。「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢執らして、軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛くすくよかに、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まんとては、益荒雄心をとり隠し、あてになよびかに詠みうつすべくすること、この道のいみじき煩なれ。君が御心のとくたけきまゝにうちいで給はんには、今の人誰かは立ち並び奉らん。三尺の劔を執りて、大風起り、雲飛揚す。」とうたひ、槊をよこたへて、「鳥鵲南に。」と詠ぜし君達は、鞍の上

にて、文に遊ばせ給ふならずや。」と云ふ。「人々、あれ聞き給へ。世は捨てたれどたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓矢の上手となん聞ゆる。傳へたることもあるべし。かくこそと思ひしみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」こは益、恐ある御問はせなり。つは者の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にさへ物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなど、聞え奉るべうも覺えはべらず。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親のいつくしみをさへあだなるものにして、年纔かに二十五にて家を出でたるいたづら者の、弦ひき一つだに心に留めしことも侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、賞を重くし、罰を軽くせよ。」といひしと

疽を吮ふ
衛の吳起
竈を滅す
齊の孫臏

「任ずる者を辱むれば危し。」といひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、まことの情よりとも覺え侍らず。竈を滅して、人を危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め、天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、あやしきまでかしくませるを、餘所ながら見聞き奉るには、この御問ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷に摺りつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒飲まざるべし。鹿・猿のなかに立交りて、歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷かなるにも飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は、暖かにもこそ。この

火取法師に參らせよ。」とて、白銀もてつくりたる猫のかたちしたるを、取傳へて、君より賜ふと



西行銀猫を與ふ (筆齋容池菊)

て、前に置きたり。「鹿猿は尙心たけし、鼠をだにえとらぬ、瘦法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度おしいたゞきぬ。

あした御暇たまはりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰が殿のわらはべならん、くくり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、これ取らせん。火埋みて手足煖め



よ。とて、かのきら／＼しき物を與へて、かへり見もせず立ち去りぬ。童が主なる人、いとあやし。大將殿の法師に賜はせしを、いかで童に得させけん。とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うちゑみ給ひ、かの法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけん、わが門の前に捨てゆきつるよ。法師とて、男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出て、なほ才に誇りて、野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ。とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこのことを人に語りていふ、右府はまことにねじけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れ

心なき身

心なき身にもあ

はれは知らけり

鴨立つ澤の秋の

夕暮(西行)

村田春海

國學者

江戸の人

文化八年(三四七)

歿

年六十六

芳宜園

加藤千藤の家の

雅號

來てふ

月夜よし夜よし

と人に告げやら

ば來てふに似た

り待たずしもあ

らず(古今集)

られたるは、佛の冥福といふものを、生れながら得させけん。ただ悲しむべきは、神の御裔の、この後やう／＼衰へさせ給はん世の姿なるは。とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。

(籐箕冊子)

二〇 小品三章

八月十五夜芳宜園にて曇る夜の月を見る

村田春海

芳宜園の月のまともは年ごとのちぎりなれば、來てふにも似ぬ夜のさまなれど、今宵も例の人々詣で來にけり。さるは降りく

月にうきくまとならじときりの葉の秋たつからにちりはじむらむ 春海

月よよまよくと

かきくらす

かきくらす

かきくらす

かきくらす

かきくらす

かきくらす

かきくらす

村田春海筆蹟 (書畫大觀)

らしたる雨の名残、霽れゆかん空も覺えず、ましてさやけき光待出でんは、いと心もとなきを、更けゆかばかくのみにはあらじを。今宵は寢て明してまし。などいひつゝ、伊豫簾空しうかゝげて、空のみ打守らるるもいとわりなしや。今

宵は名に負ふ園生の花もいたづらに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみくやう聲そはりゆくも猶あかぬわざながら、流石にあはれは添へつべし。

晴間なき月をいかにといひくて、

そらながめにや今宵あかさん。

かきくらす雲間のかげはうとくとも、

月まつむしよせめて語らへ。

(琴後集)

砧を聞く

清水濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむ

清水濱臣 國學者 江戸の人 文政七年(西八四) 歿 年四十九 述懐 後の世に 残さん名こそか たからめかくて はやまじ數なら ずとも 濱臣

近しと聞けば遠し、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむ

清水濱臣筆蹟 (書畫大觀)

もまたしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらん、砧の音の雁がねに通ふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そも此の

音の悲しきか、住む里のさびしきか、打つをりのうきゆゑか。皆
あらず、聞く人の心のさびしきなり。(泊酒舎集)

夕

中島廣足

中島廣足
國學者
熊本藩士
元治元年(五三)
歿
年七十三

遠山寺の入相の鐘、時に歸る夕鴉もいつしか聲しづまりて對へ
る文卷もやうく見えなくなりゆくに、心ゆくわたりはいとくち

玉 明石海神の
こはし、白玉は
あまのをさしぞ
かづき出ぬる
廣足

玉

明石海神のこはし、白玉はあまのをさしぞかづき出ぬる廣足

中島廣足筆蹟
(觀大畫書)

をしきものからし、ばし打置きて、はしの方に、出づれば、暮れのこ
れる、稍どものほのかなる山のは、はつかにあらはれたる三日
月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥の、あやしき聲
に鳴きゆくが、何となく物寂しげなるを、來んといひつる友はた

暮過してやと思ふも、心もとなきに燈火かゝげたるこそまづ嬉
しけれ。(樞園文集)

倉田百三

文學者
明治二十四年廣
島縣庄原町生
親鸞
淨土眞宗の開祖
本願寺の開基
弘長二年(九三)
寂
年九十

二 出家とその弟子

倉田百三

僧一「御師匠様は此處にゐられましたか。」

親鸞「唯圓と日向で話してゐました。」

僧三「御氣分は如何で御座いますか。」

親鸞「もう殆どよい。有難う。」

僧一「それは嬉しう御座います。大切に遊ばして下さい。」

親鸞「お前たちも此處でお話しなさい。本堂の方はどうだつた。」
唯圓。座蒲團を持ち來り、兩人に薦め茶をつぐ。

僧三「一杯の參詣人で御座います。お勤が済みまして、今は知應殿の説教最中で御座います。」

僧一「知應殿の熱心な説教には皆感動したやうで御座いました。」

僧三「權威のある強い説教でした。皆畏まつて聽聞致してゐました。」

僧一「今日の説教は殊に上出来で御座いました。」

親鸞「やはり法悦といふ題で、したのだな。」

僧三「御存じていらつしやいますか。」

親鸞「知應が私に話した事もあるし、さつき唯圓からも聞いた。」

僧一「宗教的歡喜といふものがいかに富や名譽など、地上の樂みよりもすぐれて尊いかを高調してお話しなされました。」

唯圓「死の恐怖もなく、孤獨の寂しさもなく、浮世への誘惑も無い

とおつしやいました。」

僧一「法悦は救の證據であるといはれました。」

僧三「私たち出家してゐるものゝ特別に恵まれた境遇である事を、あの説教を聽いて私は今更の如くに感じました。」

唯圓「私はあれを聞いて不安な氣が致します。私は此の頃は寂しい氣がいつも致します。ぼんやりしてお經を讀んでも心が躍らない時があります。私は病身で先月も少し熱が高かつたので、死ぬのではないかと怖くて堪りませんでした。今死んでは惜しくてなりません。私は何だかあこがれるやうな、浮世を懐かしむやうな氣が催して來ます。知應様のやうに強い證あかしを立てる事が出來ません、法悦が救の證據とすれば、私は救はれてゐないのでせうか。私は此の

様でも佛様が助けて下さる事だけは疑はないのですけれども……」。

僧一「體の弱いせみだらうと私は思ひます。」

僧三「やはり信心が若いからではありますまいか。」

唯四「御師匠様一體どうなので御座いますか。教へて下さい。」

私は不安で堪りません。私は助かつてゐますか。ゐませんか。」

親鸞「助かつてゐます。心配する事はありません。實は私も唯圓と同じ心持で暮してゐます。病氣の時は死を怖れ、煩惱には絶えず催され、時々寂しくて堪らなくなる事もあります。踴躍歡喜の情は、どうも疎かになり勝ちでな。時に燃えるやうな法悦三昧に入る事もあるが、その高潮は聽て

灰のやうに散り易くてな。私は始終苦しんでゐます。」

僧一（驚きて親鸞を見る）「あなたがですか。」

親鸞「私は何故かうなのだらうといつも自分を責めて居ます。よくよく私は業が深いのだ。私の老年になつてかうなのだから、若い唯圓が苦しむのも無理はない。併し私は決して救は疑はぬのだ。佛かねて知ろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた。その致方のない罪人の私等を此のまゝ助けて下さるのだ。」

僧三「では知應殿の御考は間違で御座いますか。」

親鸞「いや間違ではない。人によつて業の深淺があるのだ。法悦の相續出来る人は恵まれた人だ。私はそのやうな人を祝福する。或人は煩惱が少なく、或人は煩惱が強くて苦し

むのだ。只法悦を救の證とするのが浅い。知應にも話さうと思つて居るが、よくお聞きなさい。救には一切の證はありませんぞ。その證を求めるのは此方の計らひで一種の自力です。救は佛様の願で成就してゐる。私らは自分の機にかゝはらず只信じればよいのです。業の最も浅い人と深い人とはまるで相違した此の世の渡り様をします。しかしどちらにも助かつてゐるのです。

唯圓「私は有難い氣が致します。勿體ない程で御座います。」

僧一「私は其處に氣がつかまませんでした。法悦があつても、なくても、私達の心の有様の變化には拘りなしに救は確立してゐるので御座いますね。」

親鸞「それではなくては運命に毀たれぬ確かな救とは言はれませ

ん。私達の心の有様は運命で動かされるのだからな。」

僧三「やはり自らの功で助けられようとする自力根性が残つて居るのですね。すべてのものを佛様に返し奉る事は容易では御座いませんね。」

親鸞「何もかもお任せする素直な心になりたいものだな。」

唯圓「聞けば聞くほど深い教で御座います。」

親鸞「みんな助かつてゐるのぢや。たゞそれに氣がつかぬのぢや。」

僧二(登場)「皆様此處にゐられましたか。今やつと説教が濟みました。(昂奮してゐる)。」

親鸞「御苦勞でした。暫く此處でお休みなさい。」

僧二「お師匠様にお願であります。只今私が説教を終わりますと、

講座の側に五六名の同行が出て参りまして、親鸞様に是非お目にかゝりたいから、會はれるやうにとりなしてくれと頼みました。

親鸞「何か特別な用向でもあるのですか。」

僧二「往生の一大事に就いて承りたき筋あつて、はるく、遠方から尋ねて参つたと申します。皆熱心が面に溢れてゐました。」

親鸞「往生の次第ならば、もはや幾度も聽聞してゐる筈だがな。」

まことに單純な事で、私は別に話し加へる事ありませんがな。」

僧二「私も左様申し聞かせました。殊に少し御不例故、また目を變へていらしつたら、どうかと申しました。併し皆はるば

る参つたもの故、是非親鸞様にお目に懸らせてくれと泣かんばかりに頼みます。あまり熱心でございますから、私も不便になりました、御病氣のあなたを煩はすのは恐入りますが、一應お尋ね申す事に致しました。」

親鸞「それはお易い事です。私に會ひたいのなら、いつでもお目に懸ります。只私はむつかしい事は知らぬと、その事だけ傳へて置いて下さい。では此處へすぐに通して下さい。」

僧二「有難う御座います。嘸皆が悦ぶ事で御座いませう。(退場)」

僧一「遠方から参つたものと見えますな。」

僧三「熱心な同行衆で御座いますね。」

唯四「お師匠様にお逢ひ申したさにはるく、京に尋ねて來たのですね。私は殊勝な氣が致します。」

親鸞（黙つて考へてゐる）

僧二（同行衆六名を案内して登場）

親鸞（同行衆の躊躇してゐるのを見て）「さあ、此方にお出でなさい。遠慮なさるな。」

唯圓席をととのへる、同行衆皆座に着く。

親鸞「私が親鸞です。弟子を指して此の人たちはいつも私の側にゐる同行です。」

同行一「あなたが親鸞様でございましたか。」（涙ぐむ親鸞をじつと見る）

同行二「私は嬉しう御座います。一生に一度はお目に懸りたいと祈つてゐました。」

同行三「逢坂の關を越えて此處は京と聞いたとき私は涙がこぼれました。」

同行四「ほんになか／＼の思では御座いませんでしたね。」

同行五「永い間の願が叶ひ、此の様な本望なことは御座いません。」

同行六「私はさつき本堂で斷られるのではないかと氣が氣でありませんでした。」

親鸞（感動する）「ようこそ訪ねて来て下さいました。私も嬉しく思

ひます。どちらからお越しなされました。」

同行一「私共は常陸の國から参りましたので。」

同行四「私等は越後の者で御座います。」

親鸞「まああなた方はそのやうに遠くからいらしたのですか。」

同行二「随分長い旅を致しました。」

親鸞「さうでせうともね。常陸も越後も私には思出の深い國で御座います。」

同行四「私の國では、方々であなたの事を同行が集つてはお噂申して居ります。」

同行一「あなたのお遣しなされた御感化は私の國にも限なく行渡つて居ります。」

同行三「まだお目にかゝらぬあなた様をどんなにお慕ひ申した事で御座いませう。」

親鸞「私も懐かしい氣が致します。あのあたりを行脚した頃の事が思ひ出されます。」

同行五「あの頃とは色々變つてゐますよ。」

親鸞「さうでせう、もう二十年の昔になりますからな。」

同行六「雪だけは相變らず澤山積ります。」

親鸞「雪に埋れた越後の山脈の景色は一生忘れる事は出来ませ

ん。

同行一「も一度いらしつて下さる氣は御座いませんか。」

親鸞「御縁がありましたらな。だが恐らく二度と往くことはありません。もう年をとりましたでな。」

同行一「お幾つにおなりなされますか。」

親鸞「七十五になります。」

同行二「さつき一寸承りましたら、あなたは御病氣でいらつしやいますさうで。」

親鸞「はい少し風を引きましてな。もう殆どよいのです。」

同行二「どうぞお大切になされて下さいませ。」

同行三「皆の者がいか程お頼り申してゐるか知れないのですから、親鸞「はい、ようおつしやつて下さいませ。(間(唯圓を指し)此の人は

大門村
常陸國久慈郡譽
田村大門
太田町の西一里

常陸から来てゐるのです。

唯圓「私は常陸の大門村おほかど在の生れで御座います。」

同行一「同じお國と聞けば懐かしう御座います。もう長らく京に
ゐられるのでございますか。」

唯圓「國を出てから十年になります。國には父が残つてゐます
ので戀しう御座います。」

親鸞「十五年前に私が常陸の國を行脚した折に、雪に降りこめら
れて此の人の家に一夜の宿をお世話になつたのです。そ
れが縁となつて、今ではかうして朝夕一緒に暮すやうにな
りました。」

同行二「因縁と申すものは不思議なもので御座いますな。」

僧一「袖振合ふも他生の縁とか申します。」

僧二「かうして皆様と半日を一緒に温かく話すのでも、縁なくば
許される事ではありませんね。」

僧三「一つの逢瀬でも一つの別れでもなか／＼作らうとして作
れるものではありません。人の世の悲しさ、嬉しさは深い
宿世の約束事で御座います。」

唯圓「私は縁といふ事を考へると、涙ぐまれる心地がします。此
の世で敵同志に生れて傷け合つてゐるものでも、縁といふ
事に氣がつけば互に許す氣になるだらうと思ひます。『あ
あ私たちは何といふ悪縁なのでせう。』かういつて涙をこぼ
して二人は手を握る事は出来ないものでせうか。」

親鸞「互に氣に入らぬ夫婦でも縁あらば、一生別れる事は出来な
いのだ。墓場に入つた時は何もかも解るだらう。そして

別れずに一生添遂げた事を互に喜ぶだらう。

唯圓「愛してよかつた。許してよかつた。あの時に呪はないでしあはせだつたと思ふでせうね。」

三僧「人は皆仲よく暮すことですね。」

一同しんみり沈黙。

同行一「膝を進める」實は私達が十餘箇國の境を越えてはるく、京へ参りましたのは、往生の一義が心に懸るからで御座います。私たちは是非とも今度の後生の一大事が助けて戴きたいので御座います。皆に代つて私が一向に御願ひ申します。何卒往生の道をお教へ下さいませ。」

親鸞「さ程に懸命に道を求めなされるのは實に殊勝に存じます。私はいつも世の人が信心を軽い事に思ふのを不快に感じ

てゐます。信心は一大事ぢや。眞劍勝負ぢや。地獄と極樂との迫分ぢや。人間が一番眞面目に對せねばならぬ事だてな。だが、あなた方は國のお寺では聽聞なされませぬかの。」

同行二「毎度聽聞致してゐます。」

親鸞「どのやうに聽聞してゐられます。」

同行三「阿彌陀様に、どうぞ今度の後生を助け給はれと一筋にお願い申せば、いかなる悪人も必ず助けて下さると、かう承つて居ますので。」

親鸞「その通りです。それでよろしい。」

同行四「そこまでは度々聞いてよく承知致してゐます。それから先を詳しく教へて戴きたいので。」

親鸞「それを聞いて何になさるのぢや。」

同行五「極樂参りが致したいので。」

親鸞「極樂参りはお國で聽聞なされてよく御承知の通りの念佛で確かに出来るのです。」

同行六「でも何だか不安な気がしまして。」

親鸞「安心なさい。それだけで十分です。」

同行一「あなたの御安心が承りたいので。」

親鸞「私の安心もたゞその念佛だけです。」

同行二「でもあまり曲がなさ過ぎます。」

親鸞「その單純なのが當流の面目です。單純なものでなくては眞理ではありません。また萬人の心に觸れる事は出来ません。」

同行三「では御座いませうが、あなたは長い間比叡山や奈良で御研學遊ばしたので御座いませう。私たち無學な者には解らぬかは存じませぬが、御修養の一部をお漏しなされて下さいます。」

同行四「それを承りに遙々参つたので御座います。」

同行五「國の土産に致します。」

親鸞（眞面目な表情になる）「いやその様々の學問は極樂参りの邪魔にこそなれ、助にはなりません。信心と學問とは別事です。假令八萬の法藏を究めたとして、極樂の門が開ける譯ではありません。念佛だけが正定の業です。若し各々方が親鸞はむつかしき經釋をも辨へ、或は往生の別の仔細をも存じ居るべしと心憎く思召してはるく尋ねていらしたの

八萬の法藏
釋迦が説いた八
萬四千あるとい
ふ法門
正定の業として
往生の業として
阿彌陀佛が正し
く誓ひ定めた業
經釋
釋迦の説いた教
を記したのが經
それを解釋した
のが釋

南都
奈良の東大寺
興福寺
北嶺
比叡山延暦寺

ならば、まことにお氣の毒に思ひます。私は何もむつかしい事は存じませぬのでな。その儀ならば南都北嶺に由々しき學者たちが居られます。其處に往つてお聴きなされませ。」

同行一「御謙遜なるお言葉に痛み入ります。尙更ゆかしく存じませ。」

同行二「北嶺一の俊才と聞えたるあなた様、何のおろそかゞ御座いませう。」

親鸞「北嶺南都で積んだ學問では出離の道は得られなかつたのです。私は學問を捨てたのです。そして念佛申して助かるべしと善き師の仰を承つて、信ずる外には別の仔細はないのです。」

出離
迷の世界から脱却すること

同行三「それは眞證でござりますか。」

(一同不審の顔付をしてゐる)

親鸞「何しに虚言を申しませう。思はせぶりだと思召しなさるな。凡そ眞理は單純なものです。救の手續として、外から見れば念佛程簡單なものはありません。たゞの六字だてな。だが内からその心持に分け入れれば、限もなく深く複雑なものです。恐らくあなたが一生かゝつてもその底に達する事はありませんまい。人生の愛と運命と悲哀と――あなた方の一生涯かゝつて體驗なさる内容を一つの簡單な形に煮詰めて盛り込んであるのです。人生の歩の道すがら振りかへる毎に此の六字の深さが見えて行くのです。(段々熱心になる) それを智慧が増すと申すのぢや。經書の教

義を究めるのとは別事です。知識が殖えても心の眼は明るくならぬでな。若し銘々方が親鸞に相談なさるなら、御熟知の唱名でよろしいと申しませう。經釋の聴きぼこりは以ての外の事ぢや。それよりも銘々に念佛の心持を味はふ事を心掛けなさるがよい。人を愛しなさい。恕しなさい。悲を耐へ忍びなさい。業の催しに苦しみなさい。運命を直視なさい。その時人生の様々の事象を見る眼が濡れて來ます。佛様の御慈悲が有難く心に沁むやうになります。南無阿彌陀佛がしつくりと心にはまります。それが本當の學問と申すものぢや。

同行五「畏れ入りました。鈍な私たちにもよく腹に入りました。極樂へ參らせて戴くためには、たゞ念佛すればよいので御

座いますな。たゞそれだけでよいので御座いますな。

同行六「鋭い刀で切つたやうに、心がはつきりと致して參りました。」

同行一「只一つ私にお聽かせ下さい。その念佛して淨土に生れると云ふのは何か證據があるのですか。」

親鸞「信心に證據はありません。證據を求むるなら信じて居るのではありません。(一氣に強く)彌陀の本願真におはしまさば釋尊の教説虚言ではありません。釋尊の教説虚言ならずば、善導の御釋僞でござりますまい。善導の御釋僞ならずば、法然上人の御勸化よも空言ではありません。善導の御釋僞ならずば、法然上人にだまされて地獄に墜ちようとも私はいや假令法然上人にだまされて地獄に墜ちようとも私は怨みる氣はありません。私は彌陀の本願が無いならば、どうせ地獄の外に行く處は無い身です。どうせ助からぬ罪

彌陀の本願

阿彌陀佛がまだ法藏比丘であつた時立てた四十八の本願

善導

隋唐の間の高僧觀經疏等五部九卷を著した

法然上人

源空
淨土宗の開祖美作生
建曆二年(一八七二)寂年八十

人ですもの。さうです、私の心を著しく表現するなら、念佛は本當に極樂に生るゝ種なのか、それとも地獄に墮ちる因なのか、私は全く知らぬといつてもよい。私は何も彼もお任せするのぢや。私の希望命、私そのものを佛様に預けるのぢや。何處へなと連れて行つて下さるでせうよ。

（二）同暫く沈黙

同行一「私は恥かしい氣が致します。私の心の淺ましき證據が無くては信じないとは何といふ卑しい心で御座います。」

同行二「私の心の自力が日に晒されるやうに露はれて參りました。」

同行三「様々の塀を作つて佛の御慈悲を拒んでゐたのに氣がつきました。」

同行四「まだく、任せ切つてはゐないのでした。」

同行五「心の内の甘えるもの、媚びるものが崩れて行くやうな氣がします。」

同行六「涙ぐむ思へばたのもしい佛の御誓で御座います。」

親鸞「さかしらな物の言ひ方を致して氣になります。必ずともにもつかしい事を知らうとなさいますな。素直な子供のやうな心で佛様にお縋りなさい。あまり話が理に落ちました。少し四方山の話でも致しませう。もう名所の御見物はなされましたか。」

同行一「まだ何處も見ませんので。」

同行二「京に着くとすぐ此處に御詣り致しましたのです。」

親鸞「祇園・清水・知恩院。嵐山の紅葉ももう色づきはじめませう。何なら案内をさせてあげますよ。」

祇園
清水
知恩院
何れも京都の東山にある寺
嵐山
西山の名所

同行一「はい有難う御座います。」

此の時夕方の鐘が鳴る

唯圓「お師匠様、夕ざれて涼しくなつて参りました。もうお居間で
お休み遊ばしませぬとお體に觸りますよ。」

同行四「どうぞお休みなされて下さいまし。」

同行五「私たちはもうお暇申します。」

親鸞「いや、今夜は私の寺にお泊り下さい。これから私の居間で
お茶でも入れて、ゆつくりとお話致しませう。(弟子達に)お
前たちも一緒にいらつしやい。唯圓、御案内申しあげてく
れ。」

親鸞先に立ちて退場。皆々立るちあがる。

唯圓「さあ、どうぞ此方にお越しなされませ。」

(幕)

(出家とその弟子)

高山樗牛

名は林次郎

評論家

文學博士

明治三十五年歿

年三十二

釋迦

sakya

伽毘羅國

恒河の支流

ヒニ河の畔に

あつた中印度

の王國

悉達多

siddhārtha

二二 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非
ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテス、基督の四
人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。
釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃印度伽毘羅國の王家に生る。
父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多シダタタといふ。釋迦は伽
毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり。
釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛
め、二十九の歳妻子を捨て、王城を逃れ、山林に隠れて道を修む

跋提河
Ajitavati



釋迦 (與道子筆)

ること六年終に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に本づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹て、相争ふところは、畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦こ

木鐸
金口木舌、施
政教二時所、振以
特、衆者也。
(論語註)
魯國
今の山東省泰山
のあるあたり

の間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして其の歸依する所を知らしめたり。孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、旁ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢てられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外其の風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方に遊説を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にして其の君を弑するものあり、子にして其

の親を害するものあり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時のごときはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に翻さんとす。その



孔子 (吳道子筆)

志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年。時非にして道容れられず、世復耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼吾が道遂に窮せり。世遂に吾を知るものなきか。と。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知る者なからんや。孔子答へて曰く、

嗚呼吾が道
及西狩見麟
曰、吾道窮矣。
喟然歎曰、莫知
レ我夫。子貢曰、
何爲莫知レ子。
子曰不怨天、
不尤人。下學
而上達。知我者
其天乎。
君子病沒世而
名不稱焉。吾
道不行矣。吾
何以自見於後
世哉。(史記)

「天を怨みず、人を尤めず。下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は没して名の稱せられざるを病ふ。吾が道行はれずんば、吾、何を以てか後世に見えんや。」と。幾ばくもなくして歿しぬ。時に年七十三。

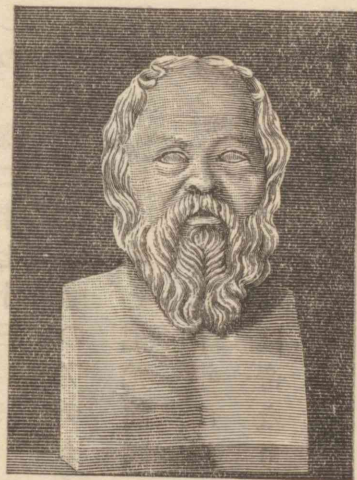
ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なりき。其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留り、道德は空文の上のみ貴ばれたり。其の狀猶釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講

ソクラテス
Socrates

詭辯學派
Sophists

じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義、其の稀代の雄辯と相俟つて一世を風靡せり。然るに喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、

「ソクラテスは國教を信ぜずして異教を翹め、以て人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるとこ



ソクラテス

アスクレピオス
希臘神話で醫
藥の神
アポロの子
基督
Jesus Christ
耶穌

ろ語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ。」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて生死靈魂未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にと知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾、一雞を以てアスクレピオスの神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。希臘の聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名を耶穌といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ義

ベツレヘム
エルサレムの
Bethlehem 西南五哩半の
ヨセフ
Joseph
マリヤ
Maria
ヨハネ
Johannes

にして、教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生る。西曆紀元元年は實は其の生後四年に當るといふ。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にて、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴游し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國たる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被り、民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。是に於て、一世の人心は齊しく偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督この間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱

エルサレム
Jerusalem
パレスチナの
舊都



基督

し、昂然として其の偉大なる新教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等これを憚らず、猥に新法、異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、神よ、彼らを許せ。彼らは其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、エルサレムの女子よ、わが爲に哭くなかれ。唯己と己が子とのために哭け」と。かくの如くして、基督は三十

三年の短き生涯を以て十字架上の露と消え去りぬ。基督死して後其弟子等は激烈なる迫害に抵抗して其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して四聖の中釋迦を除きてはいづれも轆轤不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども、是等の人々の志す所は天下後世にあり。現世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に、其の死に就くや、晏如として恰も歸するが如し。孔子は其の

涅槃
Nirvāṇa
梵語
寂滅滅度など
と譯す

一身の不幸を憂へずして、却て、わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を覺さるべからず。」と。基督は己を罪に陥るゝものゝために神に祈りたり。嗚呼、何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違なきを得ず。今其の要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを旨とす。夫、人生は苦に始りて苦に終る。生老病死何れか苦に非ざるべき。故

身を修め

古之欲明_二明德_一於天下_一者先治_二其國_一。欲治_二其國_一者先齊_二其家_一。欲齊_二其家_一者先修_二其身_一。欲_レ修_二其身_一者先_レ正_二其心_一。欲_レ正_二其心_一者先_レ誠_二其意_一。(大學)
孝は百行の本、衆善之始也。
(後漢書)

に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべからず。是、人生究竟の樂地にして、即ち涅槃なり。
孔子の教は身を修め家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて之を全うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身既に修らば家自ら齊ふべく、家齊は、國自ら治るべく、國治らば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始りて治國平天下に終る者と見るを得べし。

山上の垂訓

基督が猶太の祝福の山で求道者に教訓を垂れたもの(新約全書馬太傳)

ソクラテスの教は所謂知徳合一、説なり。謂へらく、「眞正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて行はざると行うて知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものにあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず、道德は富貴のために存せず、然れども富貴は道德の中に在り」と。
基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の貧しき者は福なるかな。天國は其の人の有なればなり。悲しむ者は福なるかな。其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴

く如く義を慕ふ者は福なるかな。其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな。其の人は憐を得べければなり。心の清き者は福なるかな。其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をもめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。偽善者の行に倣ふなかれ。隠れたるを鹽み給ふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。叩け。然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門

は濶く、其の路は大きく、これに入る者は多し。嗚呼、いかに、生命に至る門は窄く、其の路は細く、これを得る者の少なきぞや。凡そこの訓を聞いて行ふ者は磐の上に家建てたる智者の如く、聞けども行はざる者は砂上に屋を架せる愚人の如し。と。基督教の精髓は後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓に基す。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆はこの教に頼りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること、何を以てか是に比せんや。(樗牛全集)

文部省檢定

師範學校國語教科書 大正十五年三月十七日



大正十四年十月二十七日印刷
大正十四年十月三十日發行
大正十五年三月十三日訂正再版印刷
大正十五年三月十三日訂正再版發行

編者 吉田彌平

發行所 東京市神田區通神保町六番地 上原才一郎

光風館書店

電話 大東三三〇番
振替口座東京三二七番

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御註文被下候は、直に御送附可致候

卷一	卷二	卷三	卷四	卷五	卷六	卷七	卷八	卷九	卷十
金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢
金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢
金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢	金四十三錢

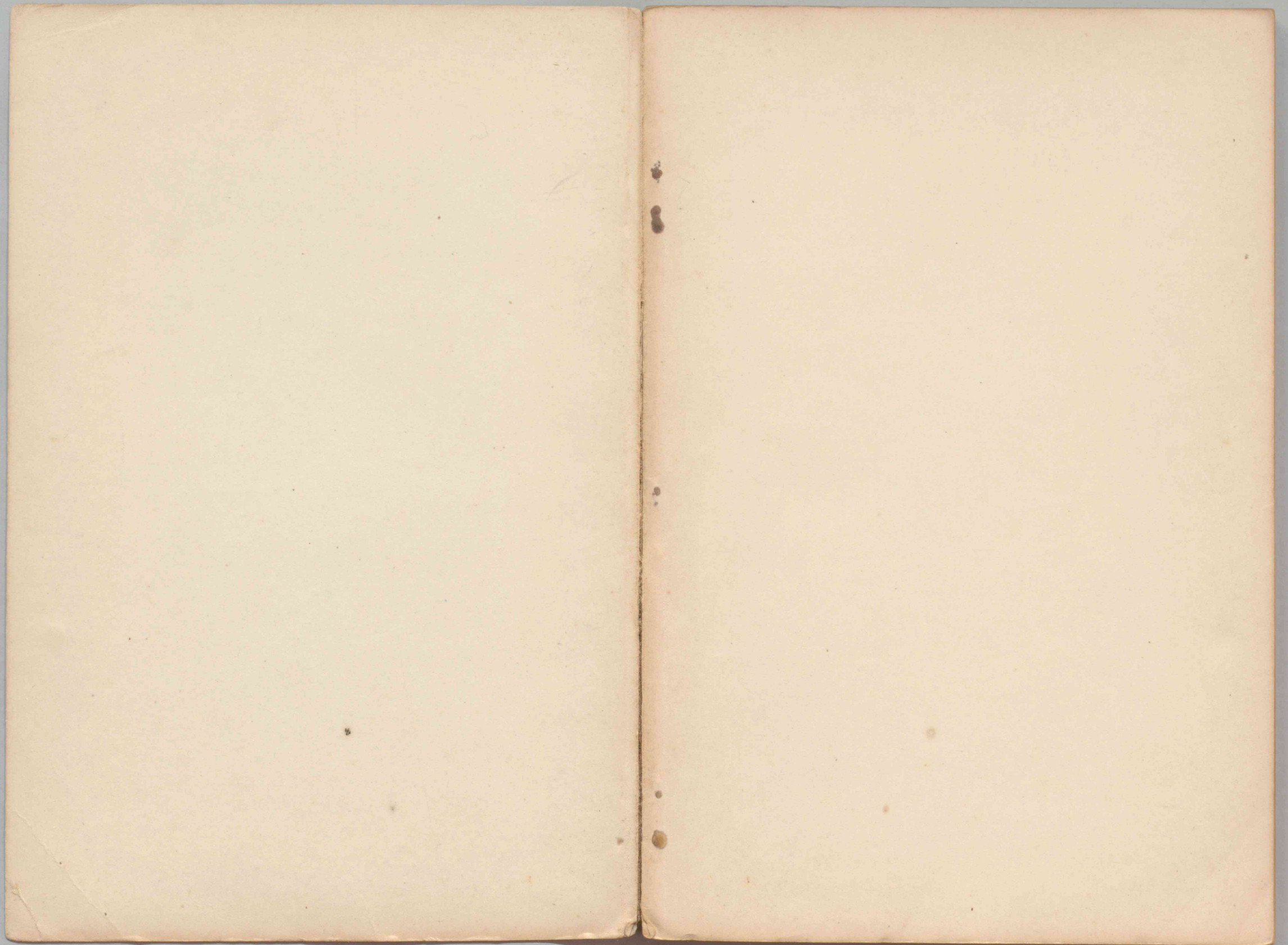
師範國文第一都用卷八

東京秀英會印刷

師範國文第一都用卷八

一六

師範國文第一都用卷八終





76
58

広島大学図書
2000302258

